

第29図 安居口ノ部い窯跡 出土遺物の種類

離し痕を残している。身46～56は受部の外径が10.3～11.4cm、器高が2.3～4.2cmで外底面は窓切り未調整としカキ目による条痕を留める。受部の立ち上がりは短くなり、46を除きわざわざに上に出る程度になる。椀126～141は口径が10.4～12.0cmの大きさで上下反転すると、杯H蓋と形態に大差がなく、無蓋で器高の低い底部が平坦なものを椀としたが、破片では区別が難しい。

また、144～150は口径が10.8～12.1cmで器高が2.7～3.2cmで、前者より更に浅い無蓋の椀に含めた。杯G蓋58～122は宝珠形摘みと内面返りを付け杯蓋の中で主体を占める。口径が8.8～13.7cmと幅があるが、5mmごとの口径分布では、9.5～10.0cmが9点、10.5～11.0cmが17点と最も多く存在し、これを除いて8.5～12.0cmでは各3～5点と集中部にかけてより多く分布する傾向がある。口径が13cm前後の中型も各1点ずつあり、57の口径17.5cmの大型1点は別器種の蓋であろうか。

杯Gの142・143、158～183、184は外底面を窓切り未調整とするものが多いが、142・177・182のように丹念に窓削りを施す例も少し存在する。底部から口縁部への立ち上がりには変化がみられ、底部から湾曲気味に外傾し口縁部にいたるものと、直線的に外傾するものがある。底部も少し丸くなるものや、扁平なものがある。154～157・184の形態の杯は各1点と少なく特異な存在を示す。

杯Bは185～189と少なく、口径が12.6～13.4cmで、外方に張り出す高台を付け、外面に自然釉が薄くかかっていることから有蓋杯身である。190は体部が丸みをもち椀形をなし、高台も細く張り出し杯Bと形態が異なる。蓋123・124は扁平な宝珠摘みをつけ口縁部を欠いている。

椀形鉢191・192・197は口径に対し器高の高い191と192があり、197は口径約21.6cmで器高が低い形態である。蓋125は口径21.7cmの大きさがあり、頂部を窓削りしている。法量から椀形鉢や盤の蓋の公算が大きい。194は厚底鉢であり外底面をナデを行い、体部に二条の沈線を入れる。

198は器厚が1.5cmと厚く、小破片であるが口径27.0cm程の盤であり、底部寄りに浅い沈線二条を入れている。199～201は杯部の口径がそれぞれ22.0cm、25.0cm、28.6cmと大きく形状は盤である。201には高い脚部をつけ高杯（高盤）としており、199・200も底面調整法の類似から脚部が付くものと考えられる。窓跡採集資料には第29図に示したように、盤に低い脚部を付けた例も知られる。

201は脚部中央に沈線を入れ上下二段に分け、6世紀代の古い伝統を表現した長脚二段の透かし状の切り込みを一周に4カ所加えているが、断面が貫通していない。また、以下の高杯脚部にも透かし装飾の退化した沈線のみを縦に4本入れている。202～204は椀状の杯部を有する大きな脚部であり、四カ所に縦方向に沈線を入れ、脚部205には五カ所の内、図に示した一カ所のみがわずかに断面を切り込み、206には3カ所に沈線のみを二段に描き込んでいる。212～216・223は口径が14.0～15.2cmで深い椀形の杯部をもち、206・208～211・217～222は口径が11.2～16.8cmの深い椀形杯部をした中型の高杯である。219～235・270～272は口径9.4～10.0cmの杯形杯部をもつ。231は杯部屈曲部に二条の縦を巡らせる。266～268は口径11.0cm程の椀状杯部をもつ小型の高杯で先の271の高杯より更に低い脚部を有する。241～243は口径13.0～16.0cmの大きさで深い杯部に低い脚部が付いたものである。

長頸瓶280・281は口縁部と高台を欠くが、長い筒状の口頭部と大きく脹らむ体部をもち、下部を窓削りする。282は丸く脹らんだ体部にカキメと沈線を引き櫛状具先端で刺突文を加える。284～286は長頸瓶や細頸瓶の高台であり、287は壺の高台であろう。

短頸壺283・288～294は短い口縁部に大きく張り出す体部をもつもので、288・289・297は体部の張り出しが少ない。283は底部を一部欠くがほぼ全形が残り、299～300は小型の短頸壺で体下半を窓削りする。また、295・296の壺体部は口頭部の形態が不明であるが、295には体部上半に細い窓先による文様を縦刻している。

平瓶301・307・308は口頭部に続く体部上部に円形の閉塞板を当てたもので、304・309にも閉塞板がみられ大きさから平瓶の破片である。301は体部最大径が20cm程の大きさである。310～313も平瓶の口頭部であろう。306は閉塞板を当てた体部の上半側が残るもので提瓶として図示したが、内外面に回転ナデを行い、平瓶の可能性もある。315は提瓶で側面に把手痕跡があり、内面を二種類の叩き目文を用い調整している。横瓶316～321は口縁部5点を数え、317は体部直径が20cm程で体部中央に穴をあけ口縁部を付ける。

甕322～393には完形品がないが、口縁部はできる限り図化し口縁部形態と口径の関連を第40図に示し、形態をA～D類に分類し、更に細分した。

A類の322～342・347は頭部から口縁部まで長く伸び外反するものであり、口縁端部が上方に折れ立ち上がるa類、口縁端部が上方に尖り伸びるb類、単に外傾するc類、口縁端部が内湾し立ち上がるd類に分けた。A類の口径は55～25cmであり、大・中型の甕に用いられ、外面に櫛状具による波状文や平行沈線を施すものが多い。B類の343～346、350～354は頭部から口縁部まで短く緩く外反するものあり、口径が25～22cmまでの中型の甕である。口縁部は内湾気味に立ち上がることが多く、外面に平行沈線を一条引き、体部上半にボタン状の円形浮文を付ける例もある。

C類356～381は口縁端部が肥厚し上方に細くつまみ出し尖るa類、端部に向かって肥厚し有段の口縁をもつb類がある。口径は25～20cmであり、20cm以上を中型の甕とし、20cm以下を小型甕に便宜的に二分した。379は頭部寄りの体部上半に範記号として「/」を線刻し、398の頭部破片にも「×」を刻み込んでいる。未掲載の甕小片の同位置にも「×」を記しており、2号窯では範記号が甕B・C類の頭部に限って用いられ、種類は「×」が3例と「/」が2例を数える。D類382～388、390～392は頭部から口縁部が「く」の字状に外反するものあり、形態により端部を少し下方に引き出すa類、端部が同じ厚さのまま角張るb類、直線的に外傾するc類、直線状に伸びる口縁部端部を面取するd類に細分できる。口径は24～14cmで20cm以上の中型と20cm以下の小型に二分した。

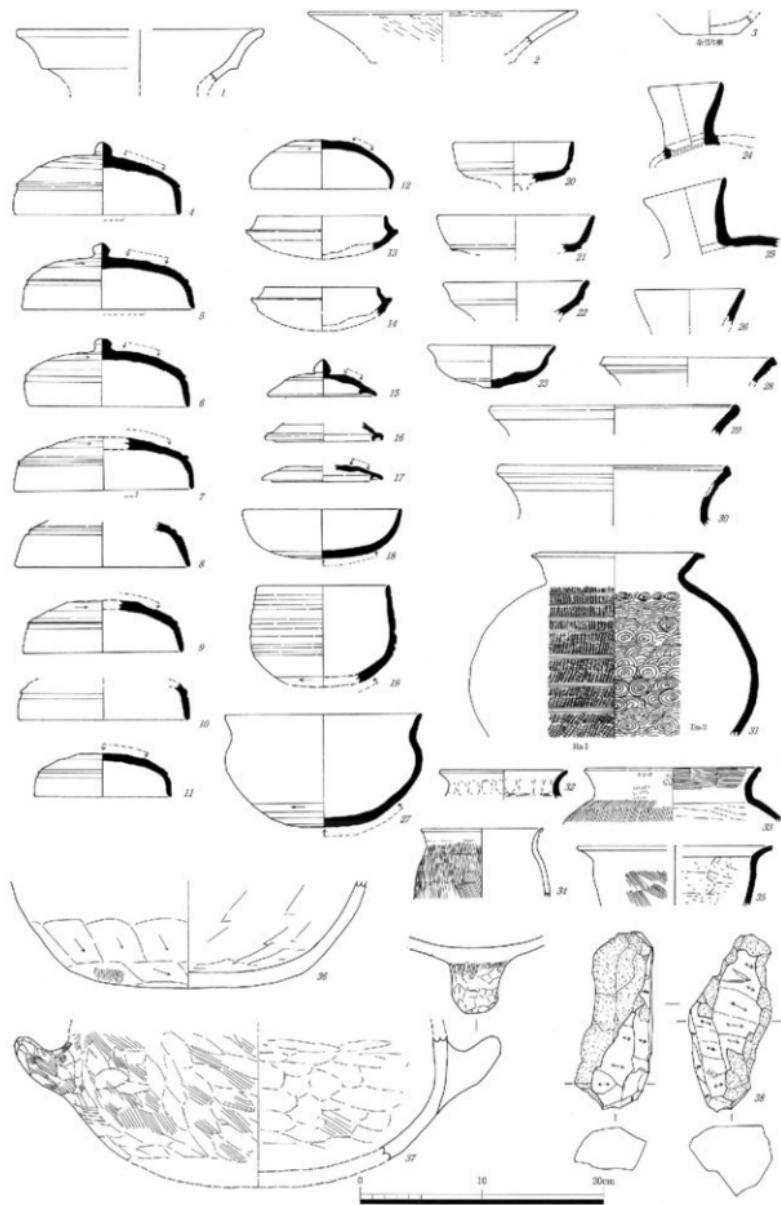
還元焼成された土器甕は、33・396～408である。口径は400の12.2cmを最小とし、401の15.4cmのほかに16.2cmまで小型が6点を占める。17.7～19.4cmの中型6点、21.2～23.5cmの大型が2点、394の29.6cmが大型の最大のものである。口縁部形態では394のように「く」の字状に強く屈曲するA類、395・398のように少し外傾するB類、397・408のように短く屈曲するC類、401・402のように口縁端部が短くわずかに外反するD類がある。器面調整は刷毛目が主体であり、404・408の範磨きする例は一部にすぎない。なお、408は破損した破片を重ね焼き台に転用されている。

土器切断片409～414は、土器形成時に不要部を切断した細片であり、還元焼成されたもの8点を数える。大きさは長さが3～6cmで、幅が1.0～1.8cmと小さく、二次焼成痕はない。

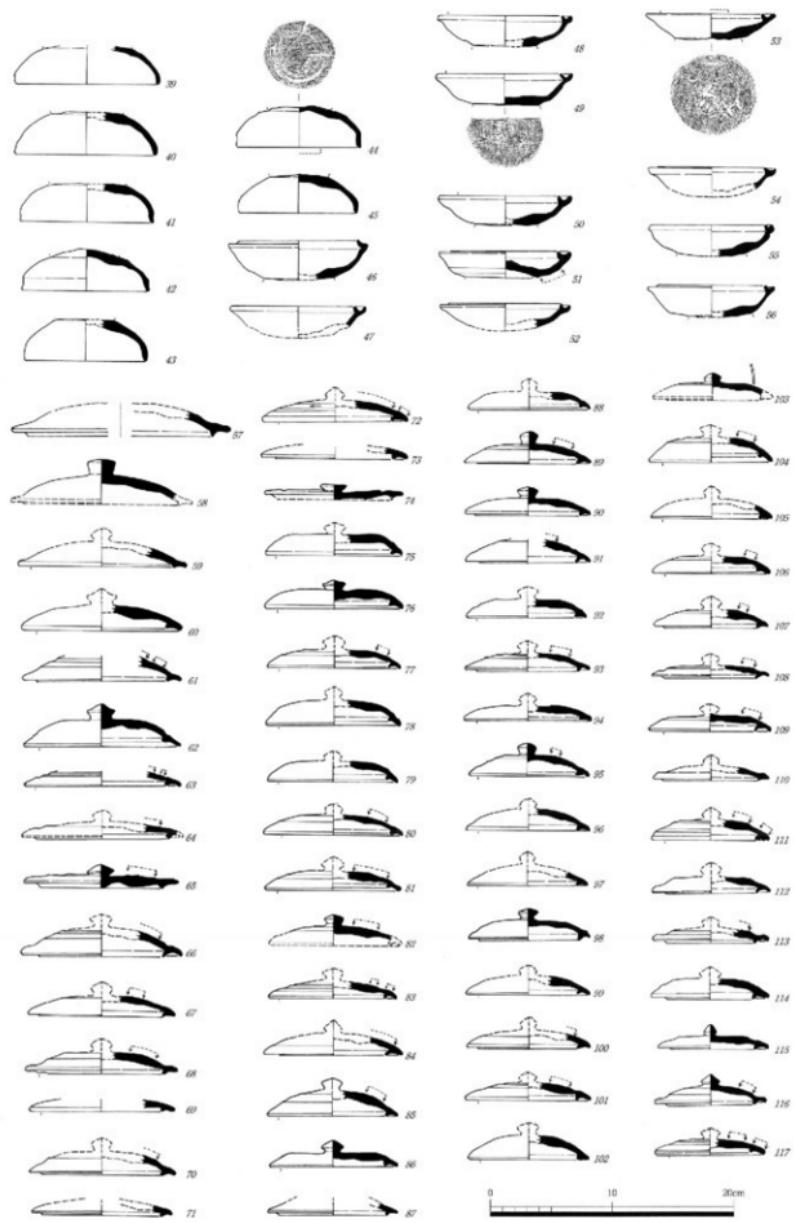
硯415は硯の下端部径10.4cmの小型品の破片で、T3の北6mから出土した。硯側面の透かし穴数は不明確であるが、断面の状態から直径が1.0cmの丸い穴とおそらく長方形の穴を組み合わせたものとみられ、丸い穴の周りに細い沈線が3本引かれている。

416はC8区灰層からの出土で脚部3本が欠損する。色調は灰白色をした須恵質生焼け品である。胴部には鞍や粘土紐による手綱が表現されており飾馬に分類される。頭部の目・鼻・口の表現はなく、手綱から続く粘土紐も片面のみにみられるが、紐は鼻や目の上にも張り付けている。鞍の後部に続く尻繁は交差し尻尾を一周させる。重量は約600gである。417は暗灰色をした長さ6.5cmの脚部であり416と大きさが似るが接合しない。

陶棺片は4点がありT1の北20mと、B8区付近から出土している。棺身の厚さは1.2cm程で青灰色

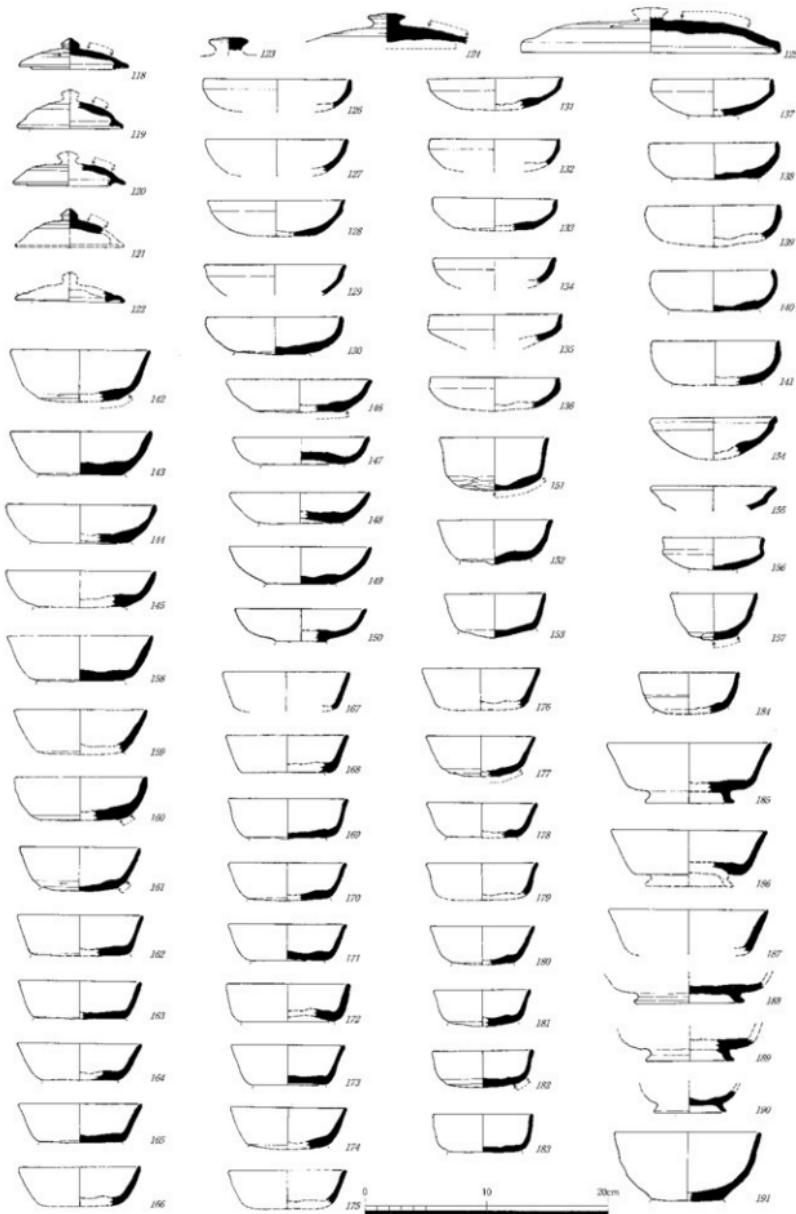


第30図 遺物実測図 (1~30・36~38, 1/4, 31~35, 1/6)  
1号窯 (4~32・34・35) 2号窯 (33・36~38) 包含層 (1~3)

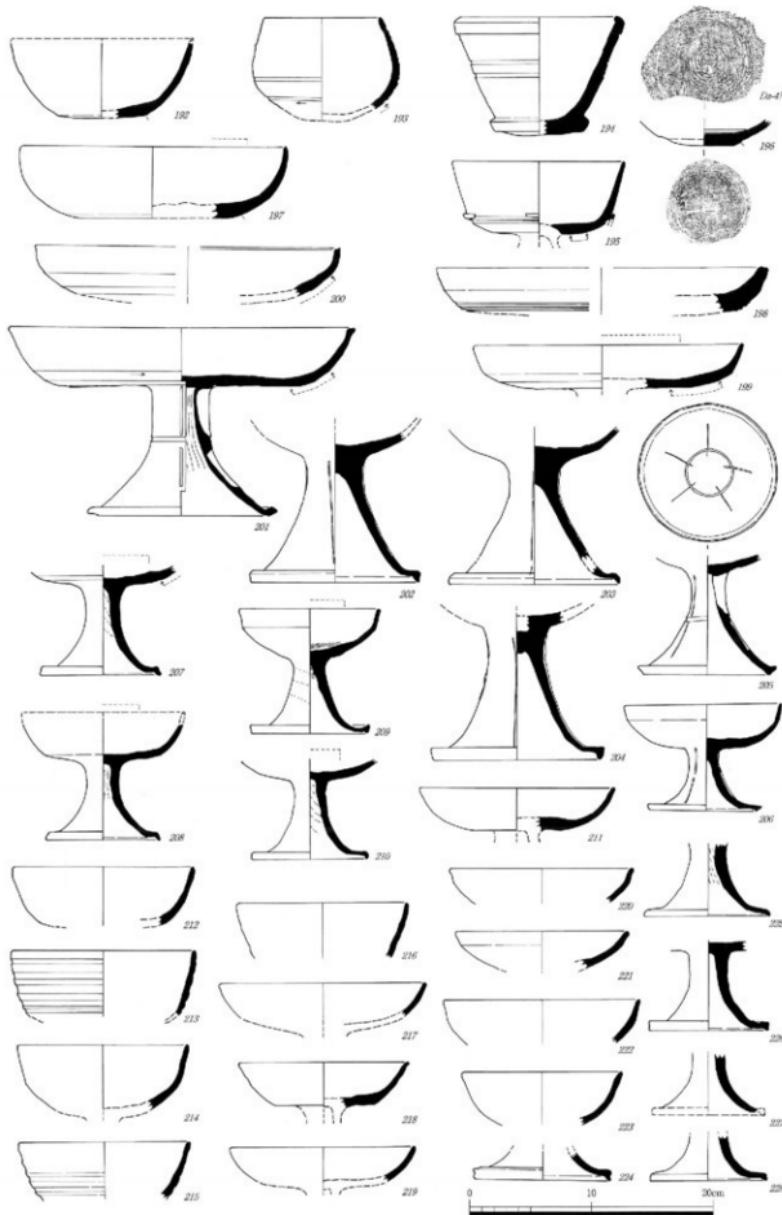


第31図 遺物実測図 (1/4)

2号窯

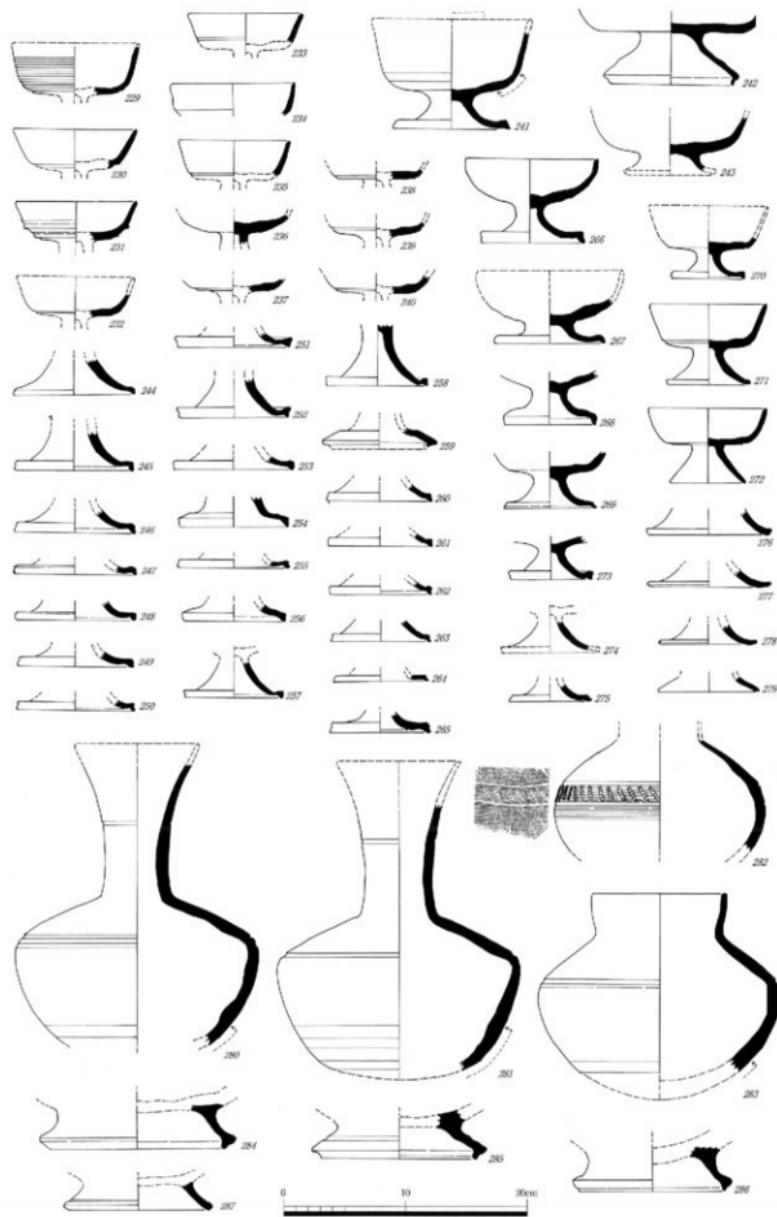


第32図 遺物実測図 (1/4)  
2号窯

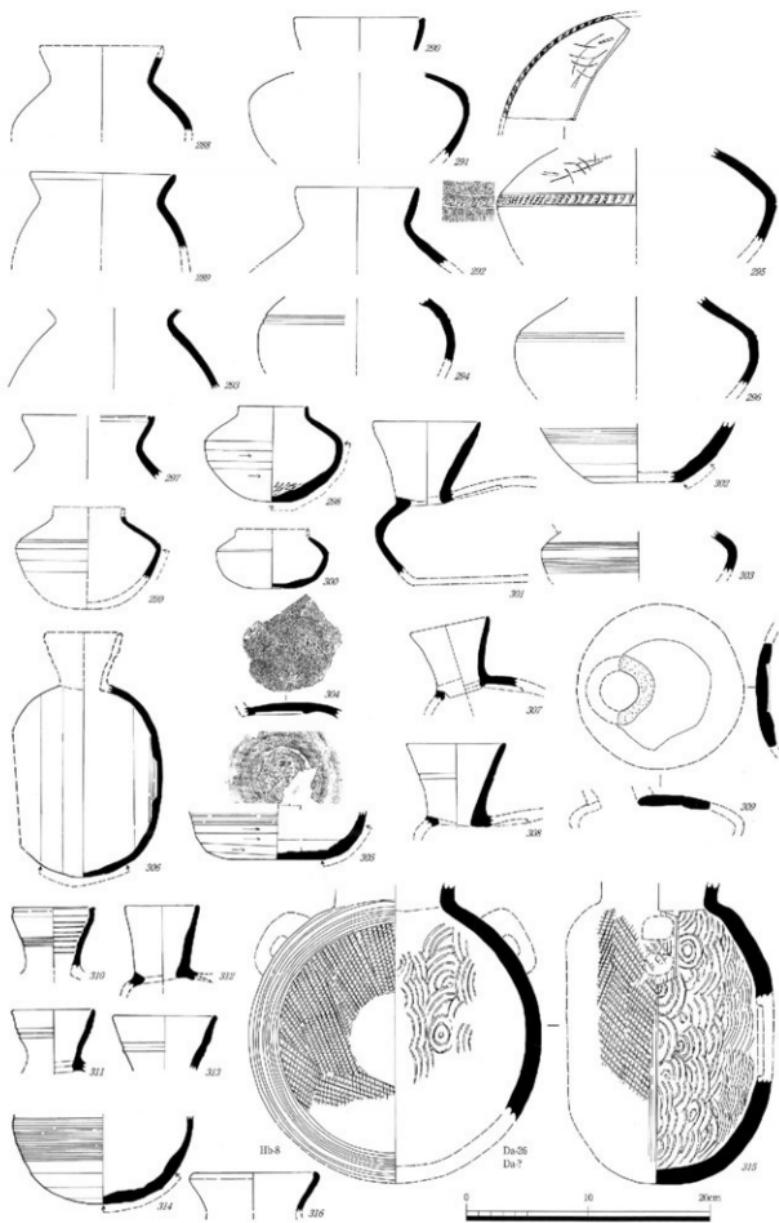


第33図 遺物実測図 (1/4)

1号窯 (193・195・196) 2号窯 (192・194・197~228)

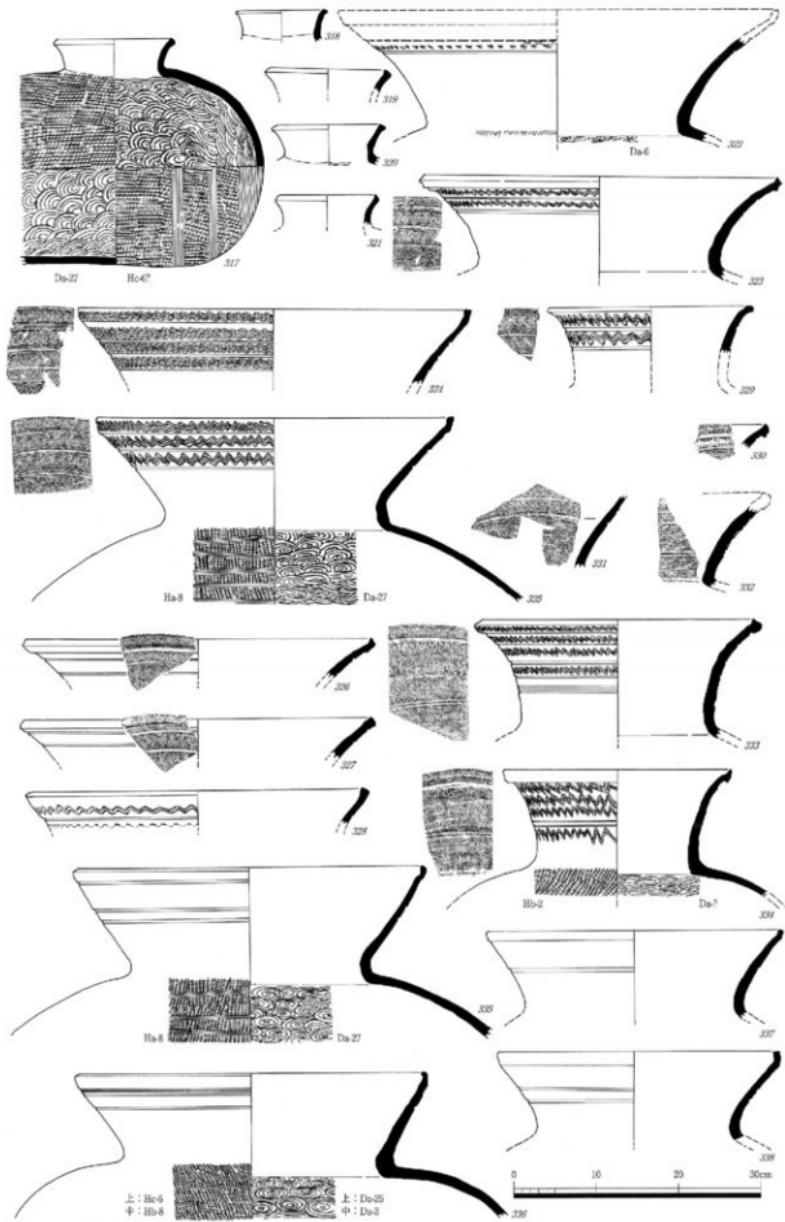


第34図 遺物実測図 (1/4)  
2号窯



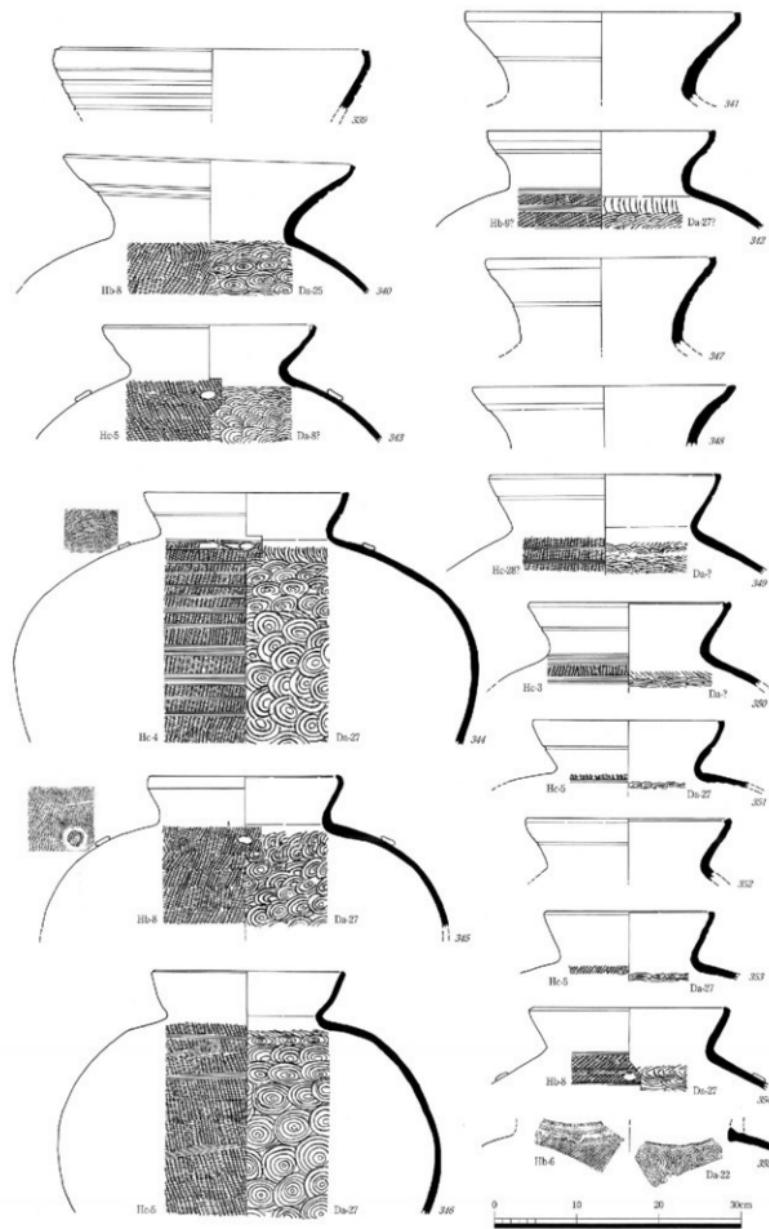
第35図 遺物実測図 (1/4)

1号窯 (309) 2号窯 (228~308・310~316)



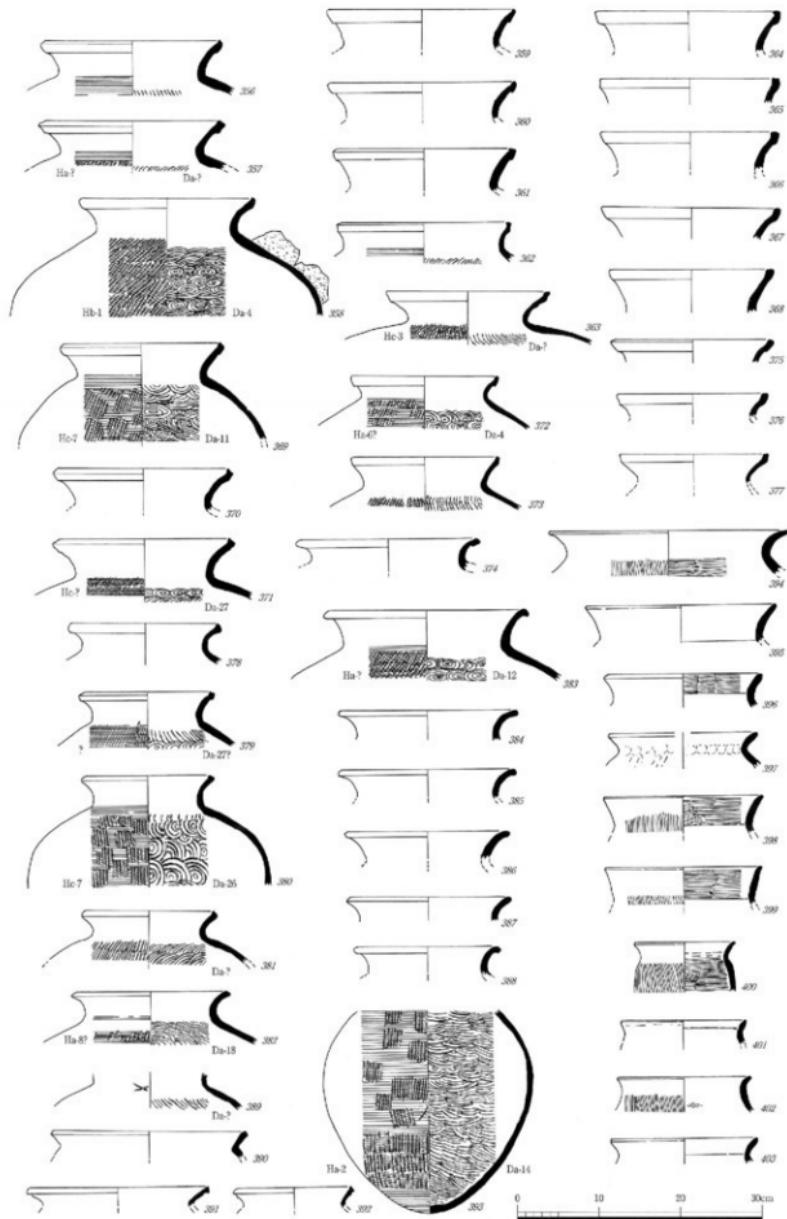
第36図 遺物実測図 (1/6)

2号窯



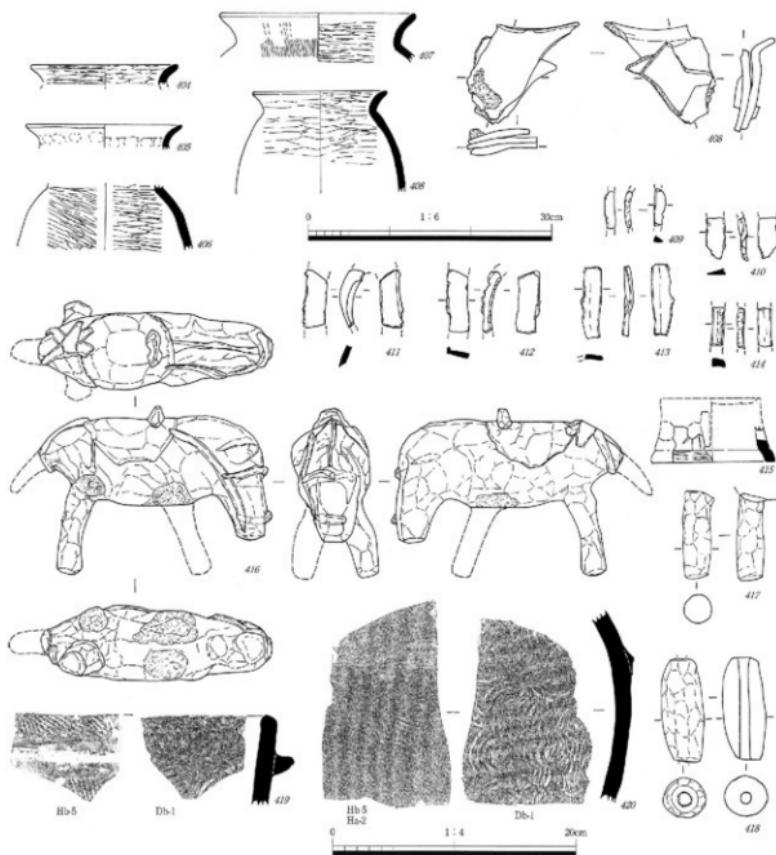
第37図 遺物実測図 (1/6)

2号窯 (339~355) 3号窯 (355)



第38図 遺物実測図 (1/6)

2号窓



第39図 遺物実測図 (404~408 1/6, 409~420 1/4) 2号窯

甕 A				甕 B				
a	b	c	d	a <sub>1</sub>	a <sub>2</sub>	a <sub>3</sub>	b <sub>1</sub>	b <sub>2</sub>
口径 55 - 40 cm								
口径 39 - 30 cm								
口径 29 - 20 cm								

甕 C				甕 D			
a	b <sub>1</sub>	b <sub>2</sub>	b <sub>3</sub>	a	b	c	d

第40図 甕の口縁部形態 (番号は図の通しNo)

に還元焼成したもので、内外面を叩き目調整する。叩き目文の原体は2号窯の壺に共通した原体がみられる。419の棺身は上端から3cm下に断面三角形の隆帯を貼付けて蓋の受部としている。棺身の上面は大きな孤状をなしている。棺蓋420は頂部の破片で、両側縁への傾斜はおよそ15度と緩い。蓋中央には幅2.5cm、厚さ0.7cmの低い突帯を張りつけ器面をナテ調整する。この他に棺の縁辺部破片は4cm程の大きさで一側面を平坦に面取りしている。

陶錐418は長さ8.2cm、外径が3.1cm、内径が0.7cmの錐で、重さが75gである。

鍋36・37はT5から出土した黄褐色の土師器で、口縁部を欠き全体最大径が30cm前後の大さである。36は箆削りした外底面全体に0.5~1.0mmの細砂粒が一面に付着する。また、37は内外面を箆磨きし、側面に把手を取り付ける。

38は肌理細かい泥岩系の石材を用いた砥石の一部である。他の割れた部分を接合すると、長さが20cmで、幅が10cm、厚さが7cm以上の大きさをした砥石であり、上面と両側面を磨き裏面が欠損している。

#### D 安居窯跡の器種組成

今回の調査は窯跡のごく一部を発掘したに過ぎず、遺物は窯跡で廃棄された遺物総量と異なる。出土須恵器は整理箱で壺が6~7割と多く、表4は須恵器の主に口縁部からみたおよその組成割合を示すものである。1号窯と2号窯では食膳具が共に72%程で主体をなし、調理具が1.5%程で、小型貯蔵具が1.3%程と少ない。貯蔵具は23%程とやや多くて土師器壺の還元焼成の煮沸具は2%と両窯とも大きな区分での割合が似かよっている。

1号窯では出土:数が

少なく、食膳具では高杯の蓋とし扱った器種が63%と高率となる。

1・2号窯統計が大まかな傾向を示すものであろう。

掲載図からみた割合では、杯身と蓋をセットにして焼成したと仮定し大きな身と蓋の比率の高い数字を用いて計算すると土器が合計277点になる。この内、食膳具が145点で52%と少なくなり貯蔵具が103点で37%と多くなる。

#### E 叩き目文について

須恵器貯蔵具の生産では、土器の器面を叩き縮め整形しているが、その際の叩き具の痕跡

区分	1号窯				2号窯				1・2号窯統計			
	口縁部	口縁部	口縁部	口縁部	口縁部	口縁部	口縁部	口縁部	口縁部	口縁部	口縁部	口縁部
器種	部数	件数	割合	部数	件数	割合	部数	件数	割合	部数	件数	割合
高杯	1	1	23%	12	23	77%	12	23	66.6%	13	24	80%
H身	2	1	15%	—	6	12%	12	160	—	8	13	175%
G身	68	3	34	121	66	94	842.5	—	—	68	97	876.5
G・丸舟	1	2	12.5%	—	60	281	1191	40.7	61	283	1203.5	—
B蓋	—	—	—	—	2	—	—	—	—	2	2	2
B身	6	12	60	29	6	2	2	2	2	6	2	20
瓶	2	2	45	16.0	—	—	—	—	—	2	2	45
高杯蓋?	8	22	179	63.7	—	—	—	—	—	8	22	179
高杯杯身	2	2	9	—	30	318	—	—	32	54	327	—
高杯身端	—	—	—	—	51	108	890	30.7	54	108	890	29.9
高杯身小片	19	33	317.5	72.2	229	740	4269.5	71.6	259	393	4567	70.3
高杯蓋	—	—	—	—	1	1	12.1	—	1	1	7	16.7
高杯身	1	1	6	—	3	3	18	31.0	4	4	24	37.5
堅耳鉢	—	—	—	—	1	1	33	56.9	1	1	33	51.6
堅耳鉢身	1	1	6	1.5	5	5	38	1.4	6	6	64	1.8
はそう	1	1	5	—	—	—	—	—	1	1	5	11.1
小平蓋	—	—	—	—	4	4	40	—	4	4	40	88.9
小平蓋みかけ	1	1	5	1.2	4	4	40	1.0	5	5	45	1.1
良堅耳鉢	—	—	—	—	3	1	9	0.9	3	1	9	0.9
良堅耳鉢身	—	—	—	—	5	7	54.5	3.6	5	7	54.5	5.2
平耳鉢	4	3	54	60.7	11	10	130	12.5	15	13	184	17.5
堅耳鉢	—	—	—	—	2	—	—	—	2	—	—	—
堅耳鉢身	1	1	11	12.4	—	—	—	—	1	1	11	1.9
堅耳鉢蓋	—	—	—	—	5	3	43	4.4	5	3	43	4.0
小・中堅耳鉢	3	3	19	21.3	15	19	194.5	20.2	18	22	213.5	20.3
大・中堅耳鉢	1	2	5	5.6	53	72	533.7	55.4	54	74	538.7	51.1
堅耳鉢身小片	9	9	89	22.9	94	114	963.7	23.6	102	123	1063.7	24.6
土器	2	2	8	—	16	19	94	—	16	21	102	—
土器身	2	2	8	2.1	16	19	94	2.3	16	21	102	2.4
陶輪	—	—	—	—	2	2	—	—	2	2	—	—
土器輪	—	—	—	—	1	1	—	—	1	1	—	—
馬	—	—	—	—	2	2	—	—	2	2	—	—
堅耳鉢	—	—	—	—	1	1	4.5	—	1	1	4.5	—
其他小片	—	—	—	—	6	3	4.3	0.3	6	6	4.3	0.3
合計	32	46	389	100	360	885	4086.2	100	392	396	4278.7	100

口縁部計測法は(宇野1982)による口縁部1/36の差長を示す。割合は1/36計測法の値から算出する。

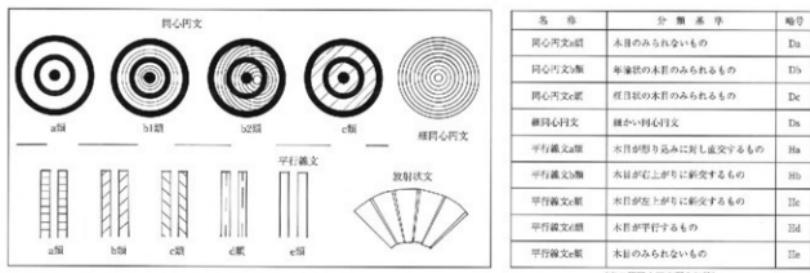
第4表 安居窯跡須恵器器種組成

が土器の内外面に残る。叩き目文の分類は花塚氏の研究成果【花塚1985・内堀1988】がありそれに従い、当窯跡出土の叩き目文の原体を区分する（第41図）。外面の叩き目文原体には彫り込みが木目に平行するH aに9種類があり、木目が右上がり斜行するH bに9種類、木目が左上がりに斜行するH cに7種類が存在する。内面の叩き目文原体には同心円文の彫り込みが施され木目がみられないD aが28種と多く数え、年輪状の木目の中心が同心円とずれるD b 2が3種に及ぶ。この他に彫り込みが少ないかまたは無文部の多いものをMにして分けると3種類がある。

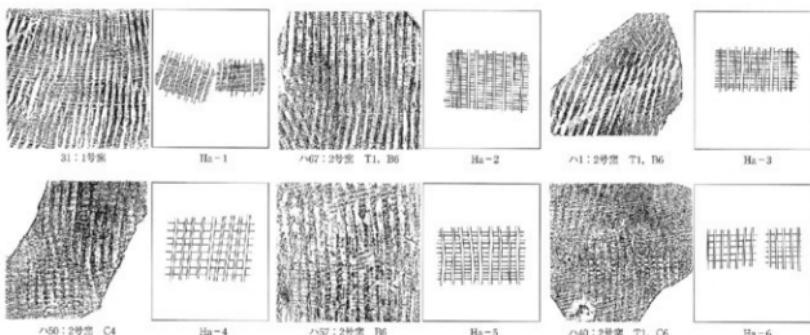
ただ、叩き目文は内面當て具の同心円の間隔や中央部円の大きさ、或は年輪状の痕跡から定点の確認がしやすくそれを目安に同定とおおよそ擬定し区分した。器面に外面は叩き具の端や隅等の定点がなく、条線の彫り込み幅・深さと木目の間隔から原体の同定と擬定をした。外面は叩き縞めが重複し、原体の比較が困難なことから中には擬定としたものも多い。今後の検討により変更される余地を含んでいる。

1号窯の叩き目文はC 6の床面直上や灰層下部出土の甕外面にH a - 1, H b - 1 ~ 3, H c - 1が施され、H b - 1が主体を占めている。内面には細かな同心円文を彫り込んだD a - 1 ~ 5を用いており、H b - 1との組み合わせが多く存在する。内面の同心円文には彫り込みの円周に沿って細かな傷跡状の工具痕がみられるものがある。また2号窯の内面叩き目文にも同様の短い傷跡状の痕跡を残している（第44・45図）。

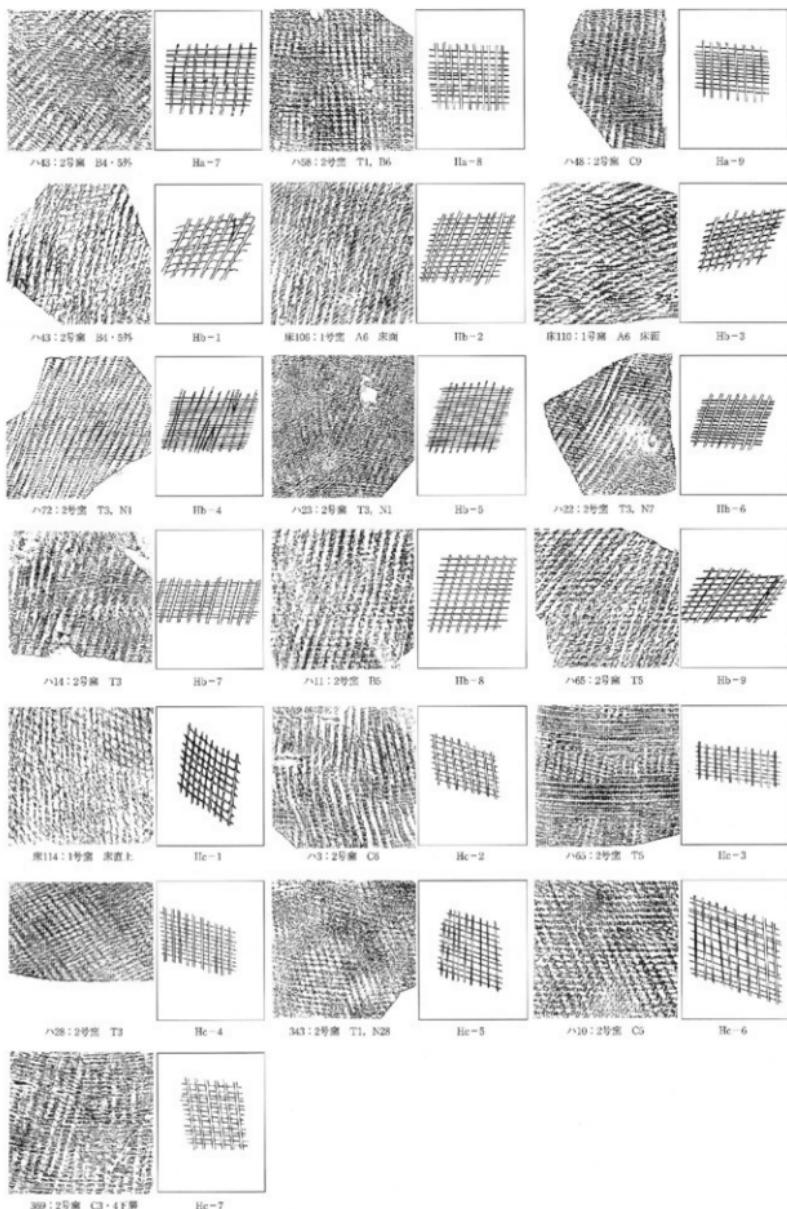
1号窯と2号窯に兼用された叩き目文にはH b - 1とD a - 2・3・5があり、H b - 8とH c -



第41図 叩き目文模式図（花塚1985・内堀1988より引用）



第42図 須恵器体部の叩き目文 (1)



第43図 須恵器体部の叩き目文 (2)

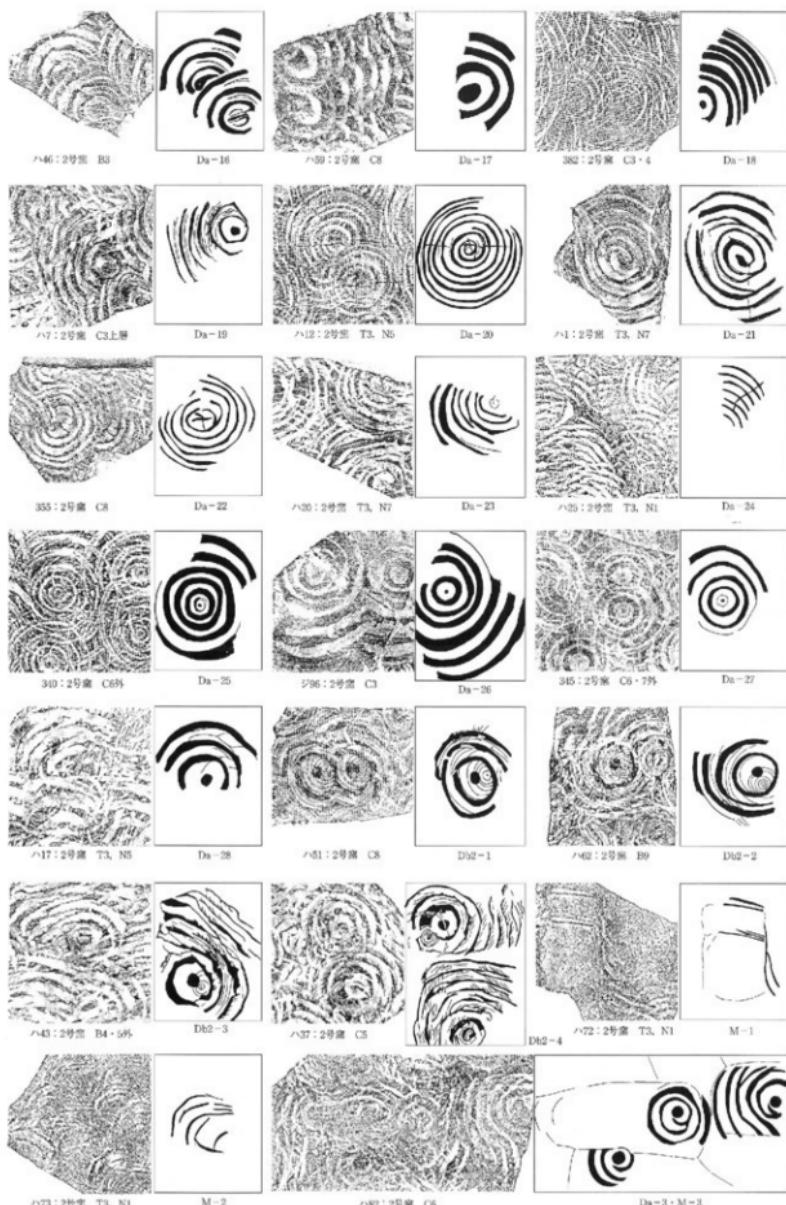
6が新たな叩き目文のセットに加わる。これは1号窯の廃棄後、短期間の内に2号窯が操業され須恵器生産に携わった同一工人グループが、両窯に共通の叩き具を使用したためであろう。

また、2号窯では一個体の窯体部上部と中程から下部にかけ内外面に複数の叩き目文をもつものが8例を数える。その相互関係は1号窯から引き継ぐDa-3や1・2号窯兼用の叩き目文にHb-8・Hc-6と組み合わせるDa-13・20・25がある。この内面叩き目文と外面とのセット関係では、叩き目文の組み合わせ原体が更に増える。また、窯体部片では内面と外面が1種類の原体を施すものが多く、多様な組み合わせがみられ、第46図上の左から右にかけ順次叩き目文のセットが増加している。各叩き目文は2~3種の叩き目文とセットとして使用されている。

第46図下の須恵器は内面にDa-25~27の叩き目文を用い、原体中央に木の心材に似た点状の痕跡を共通点とする。外面にはHa-8、Hb-8、Hc-4~7と各種の叩き目文がセットで組み合わざるが、図化した貯蔵具に限るとHa-8とDa-25、Hc-6とDa-25のセットが口径35cm以上の



第44図 須恵器体部の叩き目文 (3)

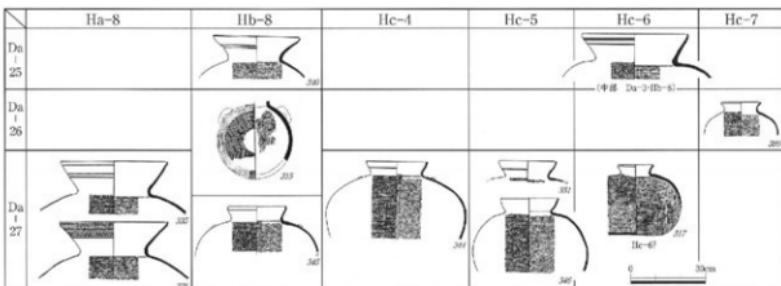
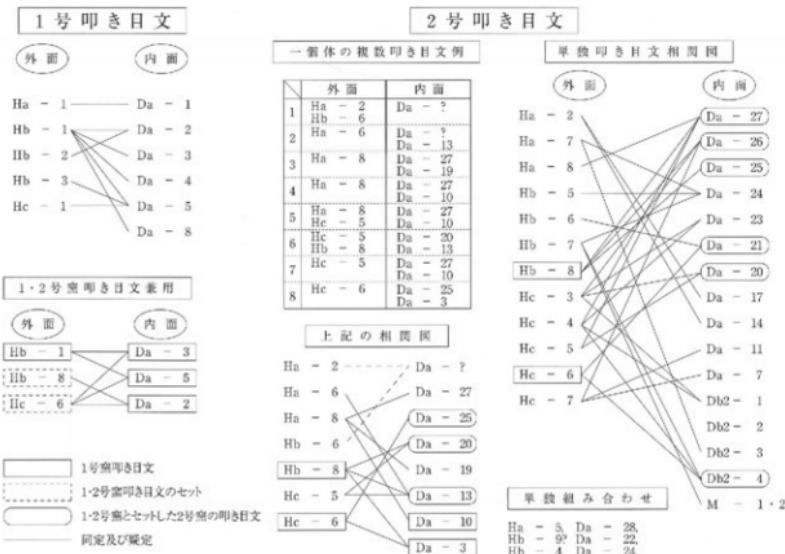


第45図 須恵器体部の叩き目文 (4)

口頭部が長い壺Aとした中・大型品に用いられ、体部下半にかけて別の叩き目文が併用されている。H b - 8・H c - 4・5とD a - 27の原体セットは頭部が短く立ち上がる口径20cm代の中型壺Bに多用される。D a - 27は横瓶に、D a - 26は提瓶と口径19cm以下の壺Bと小型の貯蔵具にみられ、法量・形態・器種によって組み合わせが異なっている。

また、2号窯の最終操業に伴う叩き目文は窯前底部付近のT 3出土の壺である。外面にはH b - 4・7を施し、内面に亀裂や中央が渦巻き状をした特異なD a - 20・21・23・24や、無文部の多いM - 1・2を用いる。このように1号窯から2号窯の操業に当たって須恵器生産にいくつかの叩き目文原体が少しづつ推移しながら使用され、2号窯では新たに叩き目文が多く追加されながら法量・器種により使い分けされ、内外面に共有の叩き目文を使っており相互の関連性から工人による須恵器生産の一端が伺える。

なお、T 3から1号窯下層出土のH a - 2とD a - 2をセットにした破片と2号窯に多用されるD



第46図 1・2号窯の叩き目文関係図

a-27とHc-5を組み合わせた破片各1点が出ている。先の破片は2号窯操業時にも引き続いで用いられたことを示している。

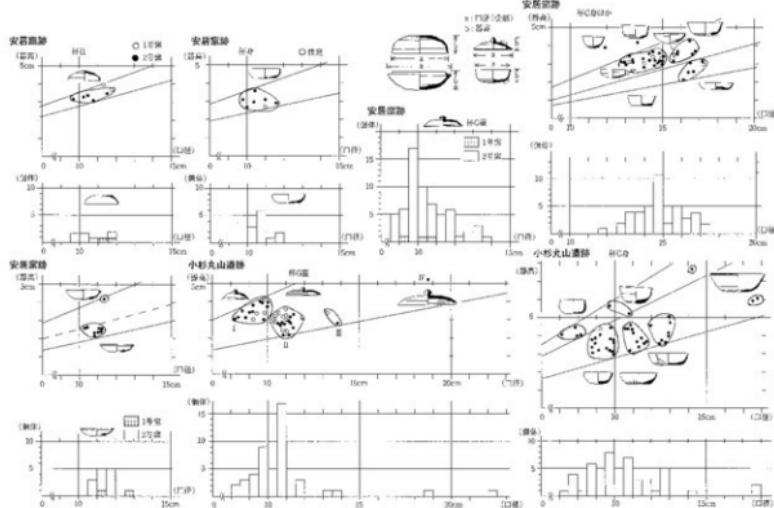
#### F 須恵器の時期について

1・2号窯から出土した器種の種類は第29図に概要を表し、各器種の組成を表4に示した。杯は、少量の杯Hと杯Gを主体とする組成をもち7世紀中葉の様相をなしている。杯の法量分布では7世紀第一四半期の小杉流通業務団地No.7遺跡1号窯では杯H蓋が12.4~14.2cmの内13cm台が多く、身の受部径は13.2~15.0cmで主に14cm台が占めていて、3号窯でもほぼ同様の大きさである。当窯跡は杯H蓋が9.5~11.5cm、身の受部径が10.3~11.5cmとかなり小型化している。主体をなす杯Gの口径は8.0~10.2cmのI類と10.5~11.8cmのII類がある。杯H蓋も身にはば対応し二類に区分される。第三四半期の小杉丸山遺跡では杯Hではなく杯Gのみとなり、更に法量分化が進み、杯身はI・II類の他に口径13cm台のIII類とその蓋が主体を占める。安居窯跡は1号窯の操業当初に伴う4~10の蓋とセットになる身は出でないが、有蓋高杯とすると口径13~14cmの受部径をもつ杯H形態をもつ高杯が想定され、法量から7世紀前半の時期が推定され、最終操業は7世紀半ばに近い前半までの時期が考えられる。

また2号窯は杯Hと杯Gの法量がほぼ同様であることと、同一原体の叩き目文が1号窯から引き継がれることから1号窯廃絶直後から操業が開始され、杯Gの法量が二つに分化でき小杉丸山遺跡杯Gの三法量に分化する以前の古い様相をまだ保ち、7世紀半ばの時期を中心に操業されている。しかし最終時には杯Bが若干存在することから一時的に少量の遺物は第三四半期の後半も操業がなされたものとみられる。

#### G まとめ

今回の発掘調査により2基の須恵器窯跡が確認され、数少ない7世紀前半から後半にかけて操業された窯である。1号窯は地下式の推定全長11.5mの大きさで窯尻に送風排煙調整用の溝が伴う可能性が高く、県内では7世紀前半の窯に類例が知られる。当窯は古代砺波郡内でも最初に生産開始された



第47図 須恵器法量

地域である。この時期は越中でも郡単位の生産がなされた時期に当たり、県内や砺波の古墳や集落への供給とそのような生産を成立させた人々を主導した手がかりを与えたもので、今後その実態が窯跡と集落出土須恵器の比較により明らかにされよう。

3・8号墳の2基の円墳は出土遺物がなく、時期は特定できないが古墳規模が10m余りと小さく1・2号墳、6・7号墳と2基を単位とする小規模な古墳群を形成し、この小地域を統治した権力者の墓地であろう。

(上野 章)



富山県での須恵器窯跡の分布

	昭和	大正	昭和	平成
対水部	—	—	新井田・白山古墳群 新井田・白山古墳群	新井田・白山古墳群 新井田・白山古墳群
砺波郡		—	猪谷・猪谷遺跡 猪谷・猪谷遺跡	猪谷・猪谷遺跡 猪谷・猪谷遺跡
猪良郡		—	猪良・猪良遺跡 猪良・猪良遺跡	猪良・猪良遺跡 猪良・猪良遺跡
守山町		—	上守山 下守山	上守山 下守山

第48図 須恵器窯跡の分布と操業期間 (宇野1991から改変)

#### 引用・参考文献

- 安念幹倫・林 浩明 1984 「安居・岩木窯跡群における新資料の紹介Ⅰ」『大境』第8号 富山考古学会
- 安念幹倫・林 浩明 山森伸正 1985 「安居・岩木窯跡群における新資料の紹介Ⅱ」『大境』第9号 富山考古学会
- 安念幹倫 1988 「安居・岩木窯跡群の概要」『シンポジウム北陸の古代土器研究の現状と課題』資料編 石川考古学研究会・北陸古代土器研究会
- 内堀信雄 1988 「須恵器甕瓶に見られる叩き目文について」『シンポジウム北陸古代土器研究の現状と課題』石川考古学研究会・北陸古代土器研究会
- 池野正男・上野 章 1984 「No7遺跡」『富山県小杉町・大門町小杉流通団地内遺跡群 第3・4次緊急発掘調査概要』富山県教育委員会
- 上野 章・橋本正春 1983 「No21遺跡」『富山県小杉町・大門町小杉流通団地内遺跡群 第5次緊急発掘調査概要』富山県教育委員会
- 上野 章ほか 1984 「No21遺跡」『富山県小杉町・大門町小杉流通団地内遺跡群 第6次緊急発掘調査概要』富山県教育委員会
- 宇野隆夫 1982 「考察」「丹波周山窯跡」京都大学文学部考古学研究室
- 宇野隆夫 1991 「律令社会の考古学的研究—北陸を舞台として—」桂書房
- 西井龍儀 1988 「小矢部川左岸における須恵器生産開始期の検討—安居ロノ部地内の窯跡から—」『両越地域史』創刊号 両越古代・中世史研究会
- 花塚信雄 1985 「叩き目文の原体同定」『辰口町湯屋古窯跡』辰口町教育委員会
- 林 浩明・山本正経 1990 「富山県福野町安居五百歩遺跡」福野町教育委員会
- 林 浩明 1990 「安居大堤窯跡群」『富山県埋蔵文化財センター年報(平成元年度)』富山県埋蔵文化財センター
- 林 浩明 1991 「安居遺跡4号墓地区」『富山県埋蔵文化財センター年報(平成2年度)』富山県埋蔵文化財センター
- 望月精司 1993 「二ツ梨丸向山古窯跡」石川県小松市教育委員会



図版11 遺構

1. 1号窯煙出し付近窯体・排水溝断面（北東から） 2. 1号窯灰甌調査前（東から） 3. 1号窯焼成部深掘り  
4. 1号窯上層遺物出土状況（2号窯からの流れ込み南から） 5. 1号窯前庭部出土状況（雨から）  
6. 2号窯灰層（3トレンチ南から） 7. 1号窯前庭部・焚口部（北東から） 8. 3号墳主体部（北東から）  
9. 作業風景 10. 現地説明会



图版12 出土遗物

1号窯 (4~6·9·11) 2号窯 (33·34·38·62·65·89·142·143·173·407~414·416·420·429)

#### 4 中山中遺跡

## A 遺跡の概要

中山中遺跡は射水丘陵と沖積平野が接する丘陵先端に位置し、標高は約15~16mである。旧石器・繩文・弥生・古墳・奈良・平安時代の各時代の遺物が出土している。周囲には遺跡が多く存在し、北には中山北遺跡（古墳時代）、東には二ツ山遺跡（古墳時代）、三谷遺跡（旧石器・弥生・古墳・奈良時代）、南には中山南遺跡（弥生・古墳時代）、弥生時代後期の方形周溝墓が確認された畠山遺跡（繩文・弥生時代）、繩文土器・石斧・石鎚が出土した太閤山遺跡（繩文時代）などがある。特に中山中遺跡と谷一つ隔てた南に位置する中山南遺跡は、中山中遺跡とほぼ同時期の弥生時代末~古墳時代初めの堅穴居住、古墳の周溝が多数確認され、県指定史跡となり公園として保存されている。

中山中遺跡は昭和28・29年に小杉高等学校校地歴班によって発掘が行われ、主に縄文土器・石斧・土偶などが出土し、当時は「石坂山遺跡」や「瑞穂農場遺跡」と呼ばれていた。中山中遺跡と呼ばれるようになったのは、昭和40年の「全国遺跡地図（富山県）」からである。昭和33年小杉町の町指定史跡とされ、昭和56年、平成元年、平成2年には小杉町教育委員会によって発掘調査が行われた。昭和56年の調査では弥生時代末～古墳時代初期の堅穴住居2棟・穴、平成元年には同じく弥生時代末～古墳時代初期の堅穴住居1棟・溝・古墳時代後期の古墳の周溝、平成2年には溝・古墳の周溝、奈良時代の堅穴住居1棟などが確認された。調査では弥生時代末～古墳時代初期の土器、奈良・平安時代の土師器が主に出土しており、縄文土器や石器も少量ではあるが出土している。



第49図 周辺の遺跡

	遺跡名	時代
1	中山中道跡	旧石器・绳文・弥生・古墳・奈良・平安
2	太閤山温泉遺跡	古墳
3	小杉燒其跡	近世
4	中山北A遺跡	古墳
5	中山北B遺跡	古墳
6	中山南遺跡	弥生・古墳
7	二ツ山古墳群	古墳
8	三谷遺跡	旧石器・弥生・古墳・奈良
9	一ツ山古墳群	弥生・古墳・奈良
10	赤田東遺跡	不明
11	圓山遺跡	縄文・弥生
12	圓山南遺跡	不明
13	圓山東遺跡	奈良
14	太閤山遺跡	縄文
15	大開遺跡	縄文
16	大開南B遺跡	奈良・平安

第5表 遺跡一覽

表面採集された遺物は縄文土器や弥生土器、土師器などの土器の他、旧石器、土偶・石冠・滑石製の大珠や丸玉・管玉などがある。

今回の発掘は平成元年度A地区調査地・平成2年度調査地の北側を調査した。

## B 遺構 (第50・51図)

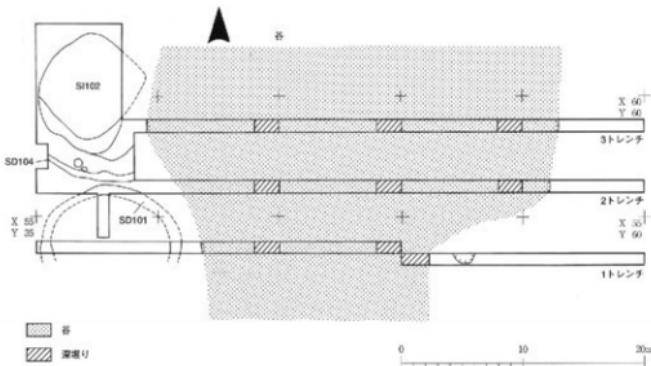
丘陵北側斜面に東西方向に長さ50m、幅1mのトレンチを3本設け、遺構の確認を行った。その結果、古墳時代の竪穴住居・溝・古墳の周溝、縄文時代の遺構・谷（土器捨て場）を検出した。

**竪穴住居 (S 1102)** 範囲の確認のため周間に拡張区を設け、調査を行ったところ、2棟以上が重なっていることがわかった。1棟は長径7.7m、短径7.1mの長方形で、深さは西側の最も深いところで地山の黄褐色土を約50cm掘りこんでいる。北側は上部が後後に削られたらしく、掘り込みは浅かった。明確な炉は確認できなかったが、中央には焼土の括がりがみられた。もう1棟は長方形の住居に北側を半分以上切られており、一辺約8mの方形か長方形である。床面に近い埋土には焼土が含まれていた。さらに周壁溝は3本確認されていることから、形はわからないが同じ場所にもう1棟あった可能性がある。遺物は埋土からは破片が多く出土し、床面近くからは比較的残りのよい高杯や器台などが出土した。埋土中の遺物は弥生時代末～古墳時代のものであるが、床面に近いところから出土した遺物は古墳時代初めのものであることから、竪穴住居の時代は一番新しい竪穴住居で古墳時代初頭、それに切られている住居は古墳時代初頭かそれ以前であると推測される。

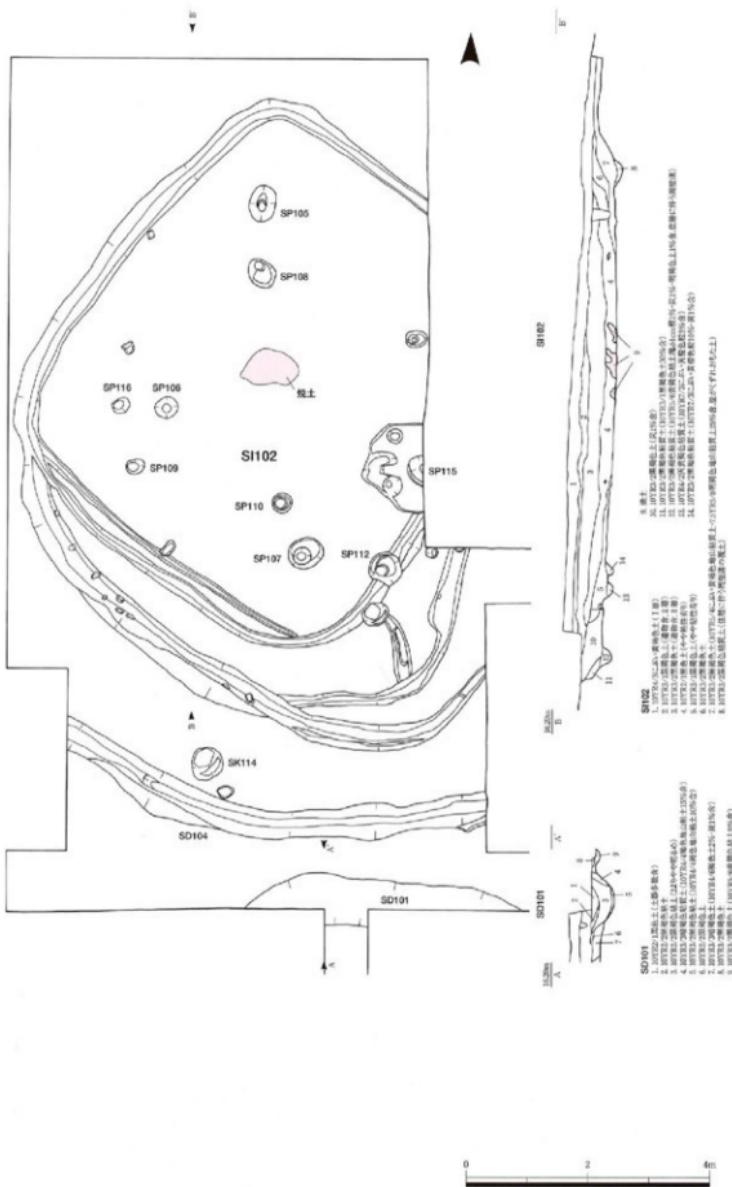
**溝 (S D104)** 住居の南側に東西方向に延び、住居に沿うようにカーブしている。幅約40～70cmに対し、深さは17～40cmと深く、断面はVの字に近い形である。遺物は埋土の高い位置から高杯、器台、壺などが出土した。住居に沿うようにカーブしていることと出土遺物から、この溝は住居とはほぼ同じ時期であると思われる。

**古墳の周溝 (S D101)** トレンチを設け、一部分ではあるが幅と深さの確認を行った。幅は約1m、深さは40cmであった。マウンドは上部が削られているため、立ち上がりのみが断面で確認できた。S D101は平成2年度調査のS D21につながる溝だと思われ、古墳は直径約10mの円墳になると推測される。築造時期は古墳時代後期で竪穴住居より新しい。

谷は3本のトレンチに計9カ所の深掘り箇所を設定し、規模・深さの確認を行った結果、東西の幅約20～30m、深さは深いところで現在の地表面から約1.7mであった。この谷の遺物は主に縄文土



第50図 調査区及び遺構図 (1:400)



第51図 遺構実測図 (1:80)  
SI102・SD101

器・石器・土偶であるが、3トレンチ西側の深掘りからは、弥生時代後期後半の遺物が出土している。

#### C 遺 物 (第52~63図)

1~66はS I 102出土の遺物である。1~25は甕である。1~12は口縁部が垂直に立ち上がるタイプで、1・2は口縁部に擬凹線文が施されている。3~12の口縁部はヨコナデのみで擬凹線文は施されない。12は立ち上がりがやや短い。13~16は口縁部が外反し、口縁端部をつまみ、口縁帯をもつ。13・14は口縁端部を上方、下方両方向につまんでいる。胴部は内面にヘラケズリを施しており、口縁部とのつなぎは鋭くなっている。外面は頭部までハケメがみられる。15・16は口縁端部を下方にのみ、つまんでいる。17は口縁部がやや内湾しながら立ち上がっている。端部は丸くおさめる。器壁はやや薄い。18・19は口縁部が弧状に外反する。端部には面をもつ。20~25は口縁がくの字になるタイプである。22は体部外面は上部がケズリ、下部はハケメ、内面はケズリを施しており、器壁は薄く、明橙色である。23はやはり明橙色で、胎土に砂が多く混じる。器壁はやや薄く、球胴である。24は外面下半部の底面に近い所はケズリ、その上はハケメ、上半部はケズリを施している。内面は下半部がナデ、上半部はケズリである。最大径は胴部ほぼ中位の倒卵形で、小さいが平底である。25は外面がハケメ、体部内面はハケメの後ケズリを施している。口縁内面はハケメである。最大径を中位やや下方にもつ倒卵形で丸底である。26・27は鉢である。26より27の方が口径が小さく器高も高い。28~30は蓋である。28は外面に赤彩が施されている。29・30はつまみがつくタイプである。31~34は蓋である。33は口縁部の内外面に赤彩が施されている。35~44は器台である。36は受部が有段で透かしをもつ。外面と受部内面に赤彩が施されている。37~43は比較的浅い受部を持つ。39と40に赤彩がみられる。43は受部端部をつまみ上げている。45~48は高杯と思われる。45~47は有段の杯部をもつ。45は小型である。49~56は高杯である。49~51は東海系でやや内湾した杯部をもち、脚部は八の字に開く。52は外側に稜がみられる小さな楕形の杯部をもつ。53~56は緩く内湾した楕形の杯部をもつ。56は脚部が八の字に開き、外面と脚部内面に赤彩がみられる。杯部内面の赤彩ははがれている。57~64は鉢形土器である。57~60は脚が付く。57・59は脚部内面以外の内外面に赤彩が施されているため壺かもしれない。64は底に孔が開けられている。65・66はミニチュアで65が鉢、66が蓋である。

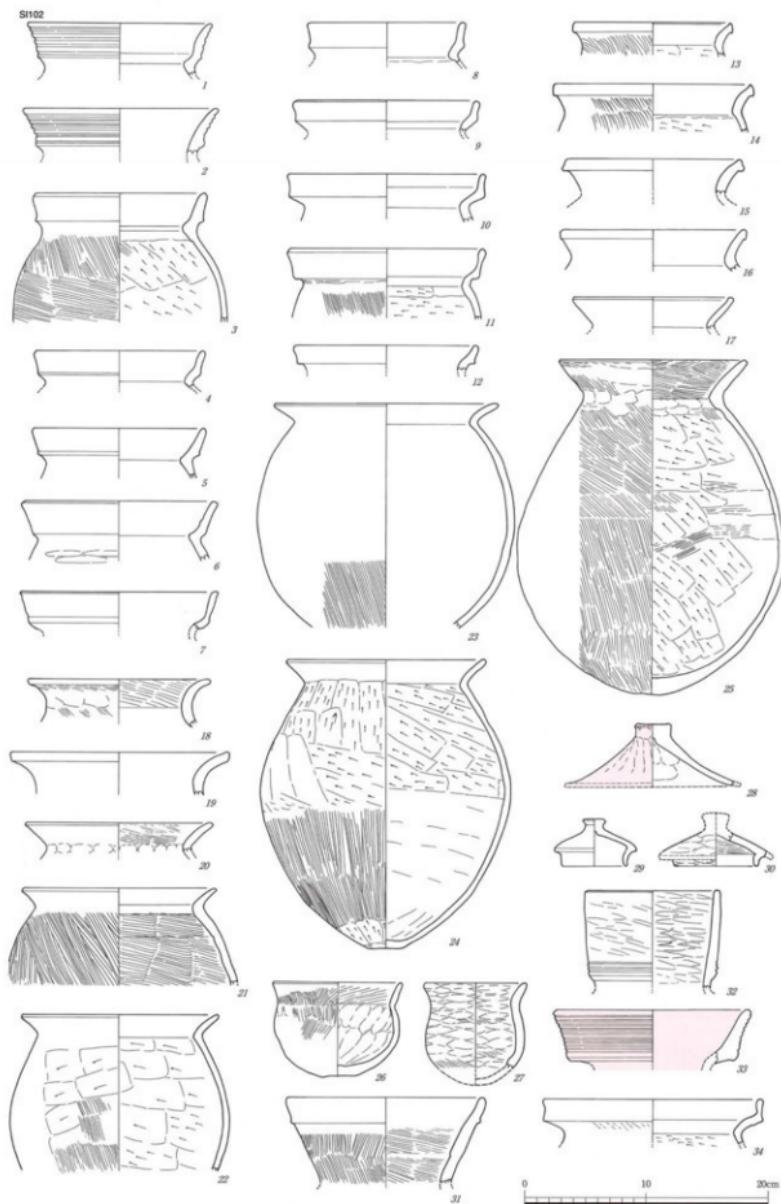
67~93はS D 104から出土した遺物である。67~74は甕である。口縁の形態は有段の67~69、くの字状の70~73、口縁端部を上方、下方につまんでいる74の3つのタイプがみられる。77~82は器台である。77は受部に透かしをもつ。79は外面と受部内面に赤彩が施されている。81は外面と脚部内面に赤彩がみられる。受部内面の赤彩ははがれたと思われる。83・84は高杯である。83は小さな楕形の杯部をもつ。75・76・85・86は鉢である。87は小型の丸底壺である。ほぼ完形である。88は蓋。89~93は蓋である。89は口縁部内外面に赤彩が施される。93は外面に赤彩が施されている。

94~101・103~106は包含層出土である。94は蓋。95・96は甕。97・98は甕か蓋。99は壺である。100の壺と105の壺は3トレンチ西側の共伴遺物である。弥生時代後期後半と思われる。102はS K 114出土の鉢。104は器台と思われ、内面は黒く、ミガキが施されている。106は土鍤である。

107~114は金属製品である。107は古墳周溝S D 101出土である。棒状で断面は四角。108~114はS I 102出土である。111は袋状の鉄斧。108はS I 102の柱穴S P 107出土の鎌である。

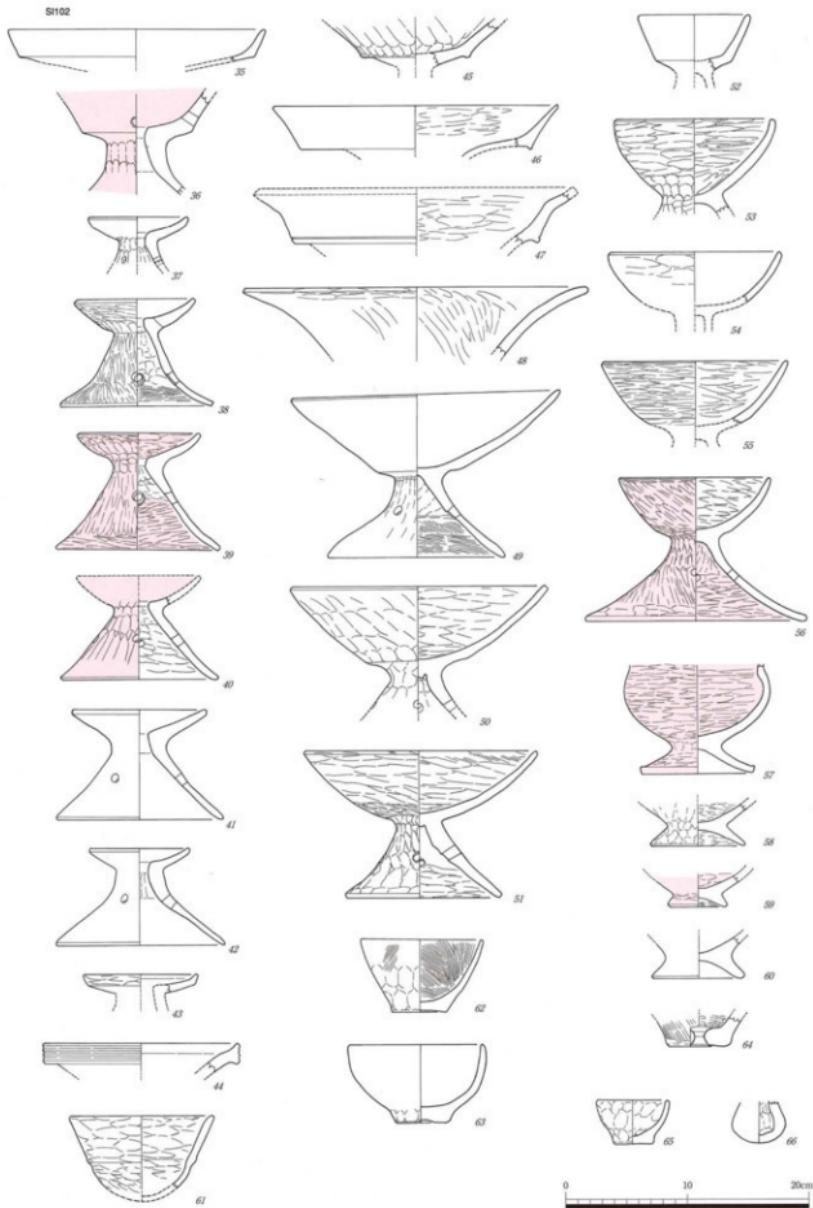
115・116は石製品である。115はS D 104出土の石鍤である。中央に研いだ痕跡があるため、砥石としても使われていたと思われる。116は包含層出土の軽石である。S I 102出土の石製品は砥石や石鎌がみられる。

(青山裕子)



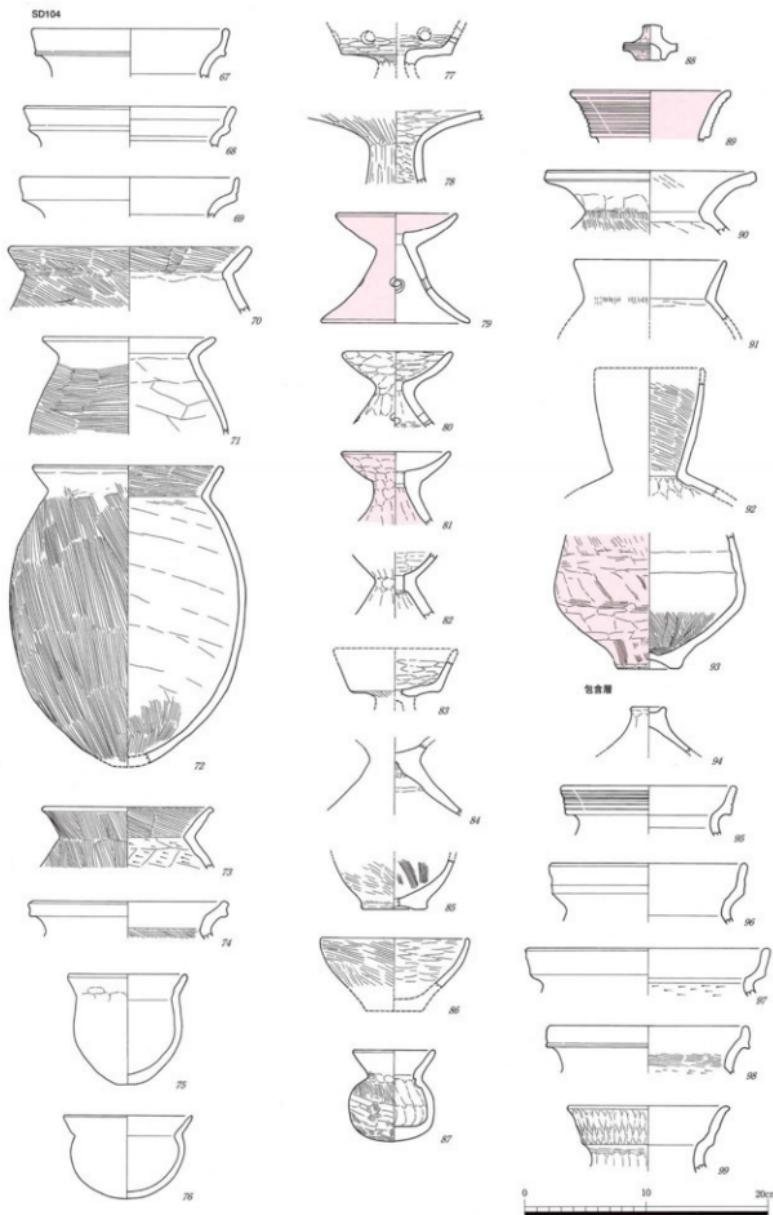
第52図 遺物実測図 (1/4)

SI102



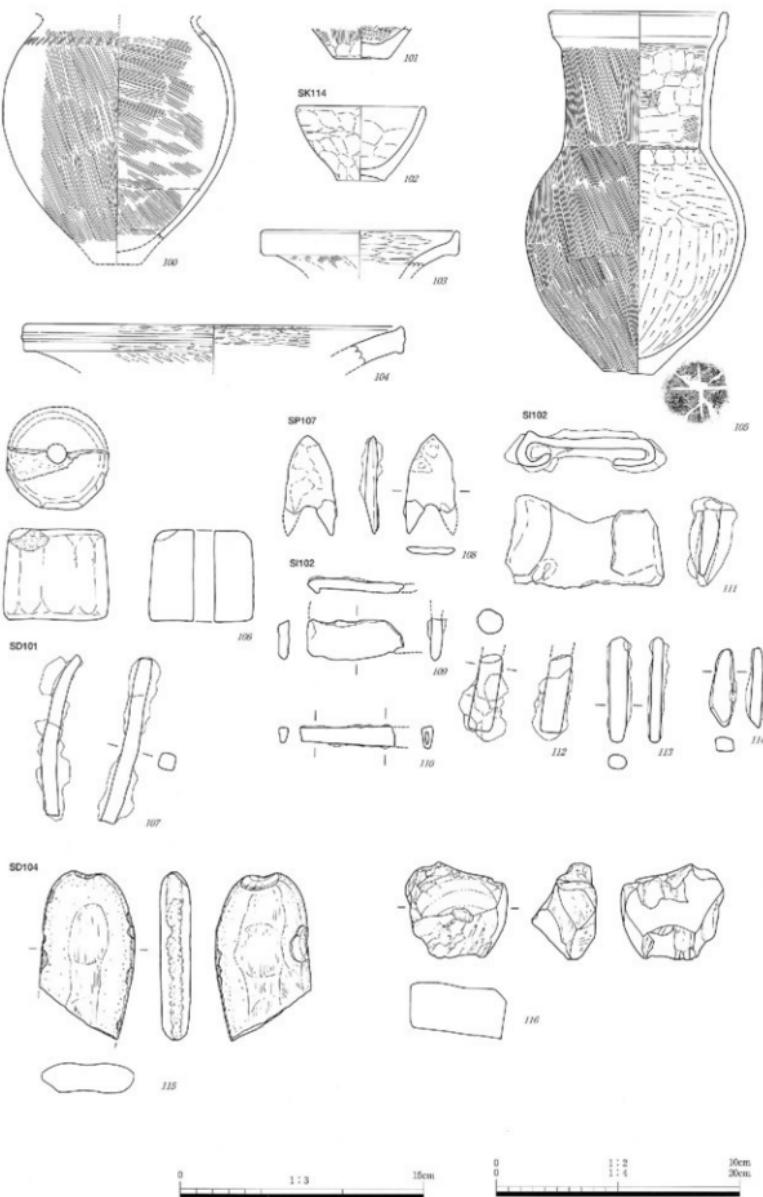
第53図 遺物実測図 (1/4)

SI102



第54図 遺物実測図 (1/4)

SD104 (67~93) 包含層 (94~99)



第55図 遺物実測図 (106~114 1/2, 115・116 1/3, 100~105 1/4)  
 SD101 (107) SI102 (109・111) SD104 (115) SP107 (108) SK114 (102) その他包含層



図版13 出土遺物

SI102 (111) SD104 (72・75・79・80・87・93) SP107 (108) 3トレンチ (105)

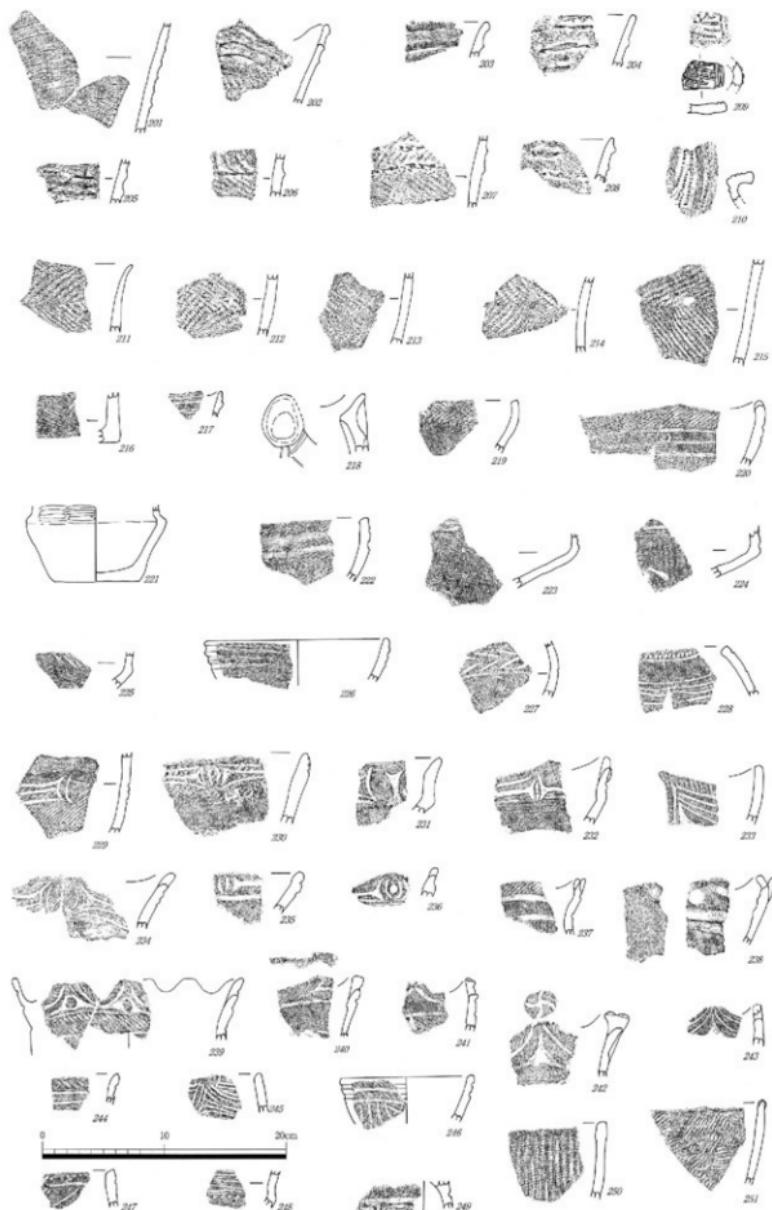
縄文時代の遺物には前期から晩期にかけての土器・石器・土製品がある。遺構は1トレンチX54 Y53で土坑を確認した。遺物は主に後期後半から晩期にかけてのもので、その他の時期の遺物は混在して出土している。201~215は前期の土器で、細い微隆起線を施す201・202や、やや太めの粘土縦を貼り付ける203~208、細い粘土縦を貼り付け連続する爪形文を施す209・210がある。201~208が蜆ヶ森式土器。209・210が福浦上層式土器。小片のため図示しなかったが、爪形文を施す福浦下層式土器と思われるものが1点ある。その他、羽状縄文を施す口縁部・胴部片がある。

216は中期の串田新式土器の底部。217~220は加曾利B式並行期の土器で、217は波頂の中間部分。219は口縁部に羽状縄文を施す深鉢で、後出的な要素をもつ。221~228は井口式土器で、凹線文を施す221~226や矢羽根状沈線文を施す227がある。228は注口土器の口縁部。

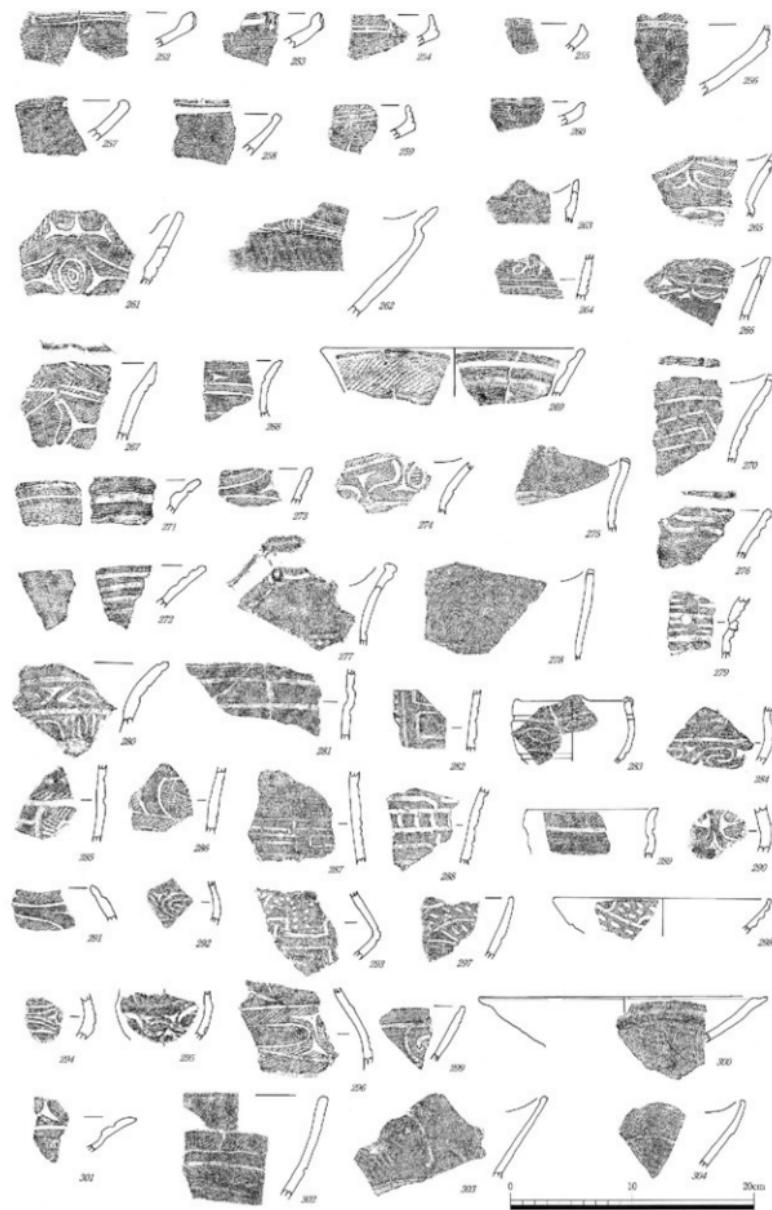
229~264・445~447は後期の八日市新保式期の土器で、弧線文と連結する三叉文を組み合わせて施す229~236や東日本的な三叉文を施す239~243がある。230・235は平縁の深鉢、231は浅鉢か。237~238は小波状口縁の深鉢で、波頂部を内面に押し窪めている。238は内面に2条の凹線と円形の押圧を施している。237~243は岩瀬天神式期の東日本的な要素の強い土器である。446は口縁端部に縄文を施す波状深鉢。447は連結する三叉文を波頂部に施す深鉢で、器形を見ると括れが強く波頂が低くなっている。このような特徴から晩期に入るのだろう。244~248は小型の鉢で弧線文を施している。246は台の可能性がある。249は台付鉢の台部分で三叉文風の文様が付けられている。250・251は平縁で縄文を施す深鉢で、250は縄を縦に施し、251は無節縄文を施す。253~260は口縁部に狭い文様帯をもつ平縁の浅鉢で、沈線を三角形に刻む252・254や連結する三叉文を施す255がある。口縁の断面形は端部が彫れる252・257、端部が小さく折れる253~256・259、平たく収める258、つまり出す260などのバラエティーが見られる。261~264は波状口縁の浅鉢で、波頂部に山の字状の三叉文その下に玉抱き三叉文風の文様を施す261や沈線を重弧文で区切る262、独特の連結三叉文を施す263・264がある。

265~309・448~452・455は晩期の勝木原・御経塚I、II式と考えられる土器で中でも265~268は勝木原式期のもので、波頂部に左右不对称な三叉文を持つ265や左右対称に文様を施す266などがあり、口縁部内面に幅広沈線を付ける例が多い。269~282・285~288・449・450・455は平縁又は波状口縁の外反器形の深鉢で、波状となるものは頂部が平坦な山形になる。胴部文様は沈線を巡らせた帯状の文様帯に入組文や三叉文を2~3段に施す。また265・279・281の様に胴部文様帯内面を凹線状に仕上げる例が多く見られる。452は口縁部が立つ深鉢で胴部に2段の玉抱き入組文に連結三叉文風の文様を交互に配している。285・286も同様の文様構成である。283~296は球胴鉢又は球胴でくの字に外反する口縁部が付く鉢と考えられる。胴部には入組文に小型の三叉文を組み合わせた文様が施される。297~304は浅鉢で、半球状になる297~299、皿状で内面に沈線を施す300・301、深い半球状の302、大きな波状口縁の303・304がある。297・298は列点を施した帯状入組文を付けている。303は内面にサンゴ状突起が付けられる。305~309は蓋で、角状の摘みがつく307・309と頂部が平坦な306がある。摘みのつくものは側面から穿孔される。451は注口土器で縄文帯で区切った文様帯の中に三叉文を配している。

310~408・453・454・456~474は晩期の中屋式の土器で、入組文や鍵手文、羊歯状文などを主文様としている。器種はくの字口縁の深鉢、大きく外反する浅鉢、半球状の鉢、蓋、注口、くの字口縁の小型土器など特に小型土器の種類が多い。310~312・453・461は口縁部がくの字状に緩く外反し、胴部の最大径が下半にある深鉢で、口縁部が縄文となるものと入組文・鍵手文などを施すものがある。胴部の文様幅は比較的広く、鍵手文や入組文を2~3段施すが、入組文と鍵手文を同時に施す例はな



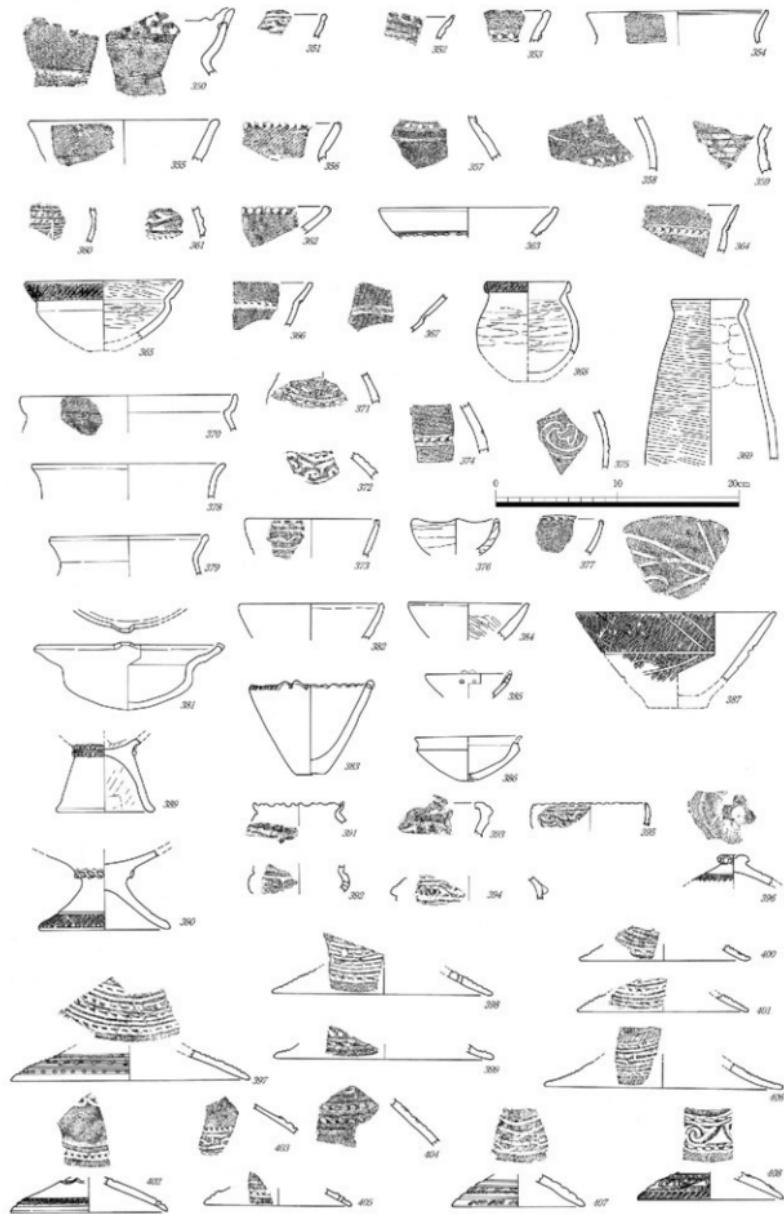
第56図 遺物実測図 (1/4)  
包含層



第57図 遺物実測図 (1/4)  
包含層

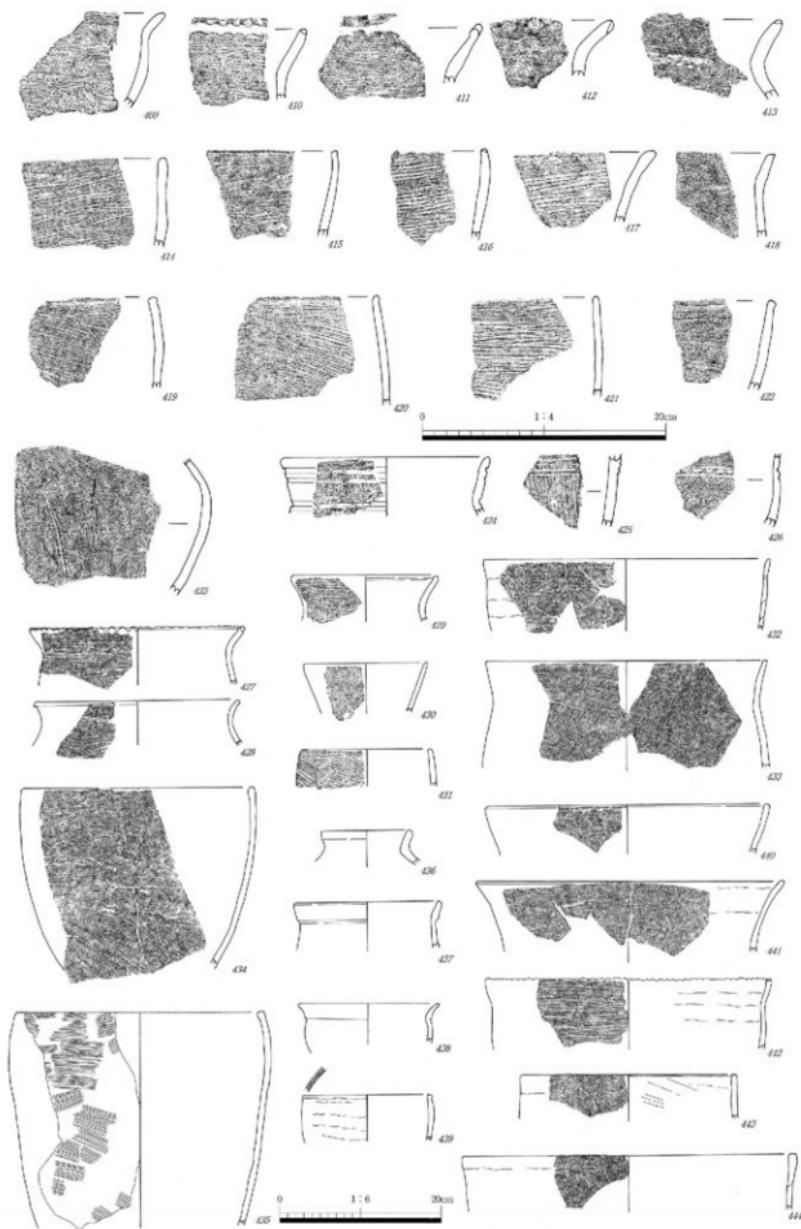


第58図 遺構実測図 (1/4)  
包含層



第59図 遺物実測図 (1/4)

包含層



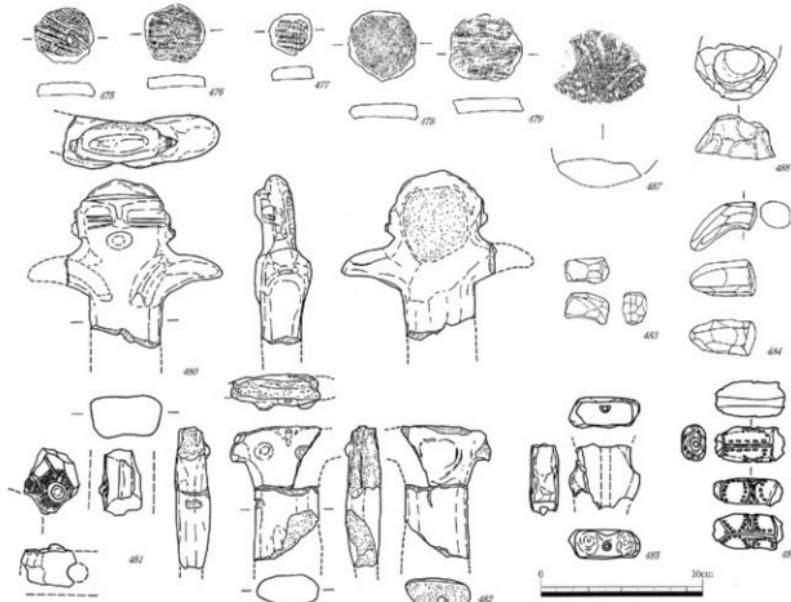
第60図 遺物実測図 (409~426 1/4, 427~444 1/6)  
包含層



第61図 遺物実測図 (1/6)

包含層

い。中屋式の中でも古い様相の土器。458は波状口縁深鉢で、波頂部にU字状の沈線と列点文、波状間を2条の沈線で結び列点文を施し胴部は鍵手文となっている。波状は5単位。この口縁に見られる文様と波状口縁は北陸には見られず、北信の要素であろうか。313~328・456・457・459~462も同様にくの字に外反する深鉢で、胴部の最大径がやや上にある。文様は入組文・鍵手文・鉤手文・羊歯状文などが施されるものと456・457の様に縄文だけのものがある。459は条痕を施し頸部に崩れた羊歯状文帯を持つ中では新しい要素と考えられる。330~340・466は大型の鉢で口縁端部に文様帯が有り2~3条の粘土紐を貼り付け、その間に連結する三叉文を施したり、渦巻状に粘土を貼り付けたりすることが一般的である。新しくなるにつれ文様が複雑となる。341~348・463~465・474は丸みを帯びた胴部の中型の浅鉢で、無文の348・464・465、口縁部に入組文を施す344・463、縄文帯のみの341・342・345・474がある。345は渦巻状の突起、474はB字状の突起が付く。350~361・370~375・378・379・467・471・472は中・小型で、くの字口縁を持つ壺状器形のもので器面は黒色を基本とし、丁寧に磨かれ、部分的に赤彩されるものがある。369は条痕を施す徳利状の器形となるもので大洞C2式並行期の壺。343・362・364~367・469~471・473はくの字口縁で胴上部が括れる鉢で良く磨かれる。473の様に粘土紐を貼り付けた渦巻状の突起が付く例もある。381は口縁が大きく外反する無文の鉢で、口縁部にはB字状突起が付けられる。376・377・382~386は外反形の小型の鉢で、コップ状でB字状突起が付く383、口縁端部を小さく外反させる386などがあり種類が多い。387は外へ聞く鉢か蓋と考えられる土器で、入組文が施される。389・390は器台で脚のくびれ部に隆帯を設け、刻みを施す。御経塚・中屋式期にはあまり見られないが、中型の鉢につくと考えられる。391~395は大洞式系の注口土器の一部で、入組三叉文や羊歯状文が施されている。薄作りで丁寧に磨かれている。



第62図 遺物実測図 (1/3)  
包含層

396~408・454は蓋で、出土量も多い。羊齒状文に由来すると考えられる刻みを持つ例が多く、入組三叉文の403・408や鍵手文の406などは少ない。摘み部分は4分割する396や、くの字状口縁深鉢の口縁端部の刻みと同様に仕上げる454がある。

条痕の深鉢には、短くくの字状に外反し端部を刻む409~413・427、繊く小さく外反する418・442、大きく外反する417・433・441、やや内屈する414~416・419~422・431・434・435・439、直立的な口縁部の432・443・444などがみられる。428・429は広口の壺状の器形。437・438は折り返し口縁をもつ鉢。423~426は下野式土器の古い段階。423は壺の胴部。424は口縁部に3条の沈線を施し、縱条痕をしている。426は沈線区画に列点文を施す深鉢胴部。条痕の深鉢では時期を決める要素が少なく、はっきりとしないが、中屋式から下野式までのものを含んでいると考えられる。

土製品には、土製円盤・有孔球状土製品・手づくね土器・土偶がある。土製円盤は径が2・3.5・4.5cmの3種類がある。487は数条の沈線の間に刺突文が施されており土偶の腹部が剥がれたものとも考えられるが、形が異なるため有孔球状土製品とした。488は粘土塊を指で押さえて作られたもので、中央が窪む。480~485は土偶で、480は頭部と胴上半の破片で眉と鼻は貼り付けた粘土を盛り上げて表現する。日は3条の沈線で表しているが、遮光器か刺青の表現とも見える。口は浅く円く窪める。また両肩からは、隆帶が胸元まで下がる。乳房の表現か。481・482は胴部上半の破片で、粘土を盛り上げ乳房を表現している。485は胴部下半の破片で、脚がつけられた部分がソケット状となっている。483・484は腕部の破片。土偶のうち481と485は胴部に穴が穿たれていることからいわゆる消化器土偶と呼ばれるものである。486は注口土器の注ぎ口と考えられる。

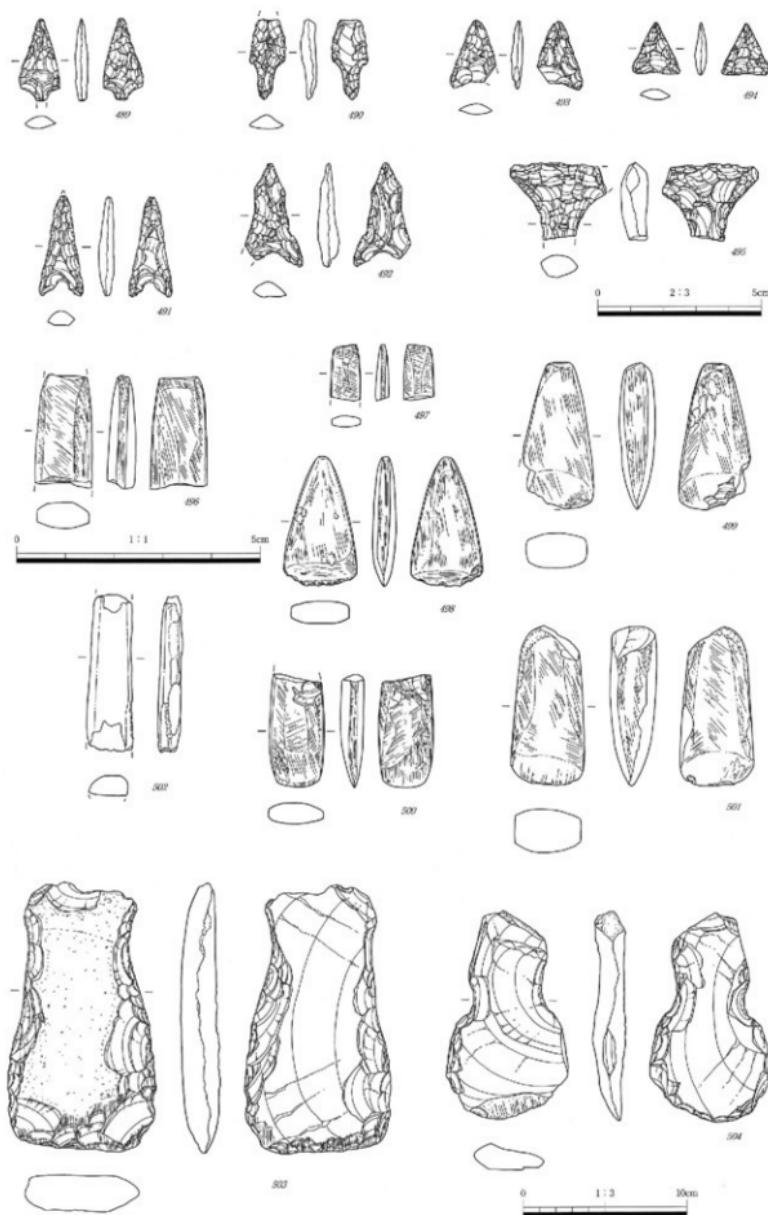
石器には、石鎌・石錐・磨製石斧・打製石斧・石剣・砥石がある。石鎌は、有茎・凹基・平基など10点ある。493・494は前期のもの。495は、T字形の石錐で刃部を欠損している。496・497は小型の磨製石斧でいずれも刃部を欠損する。497には、着裝部に使用痕がつく。498~501は定角式の磨製石斧。502は石剣か石棒の破片。503・504は打製石斧で、総数8点が出土している。 (酒井重洋)

## D まとめ

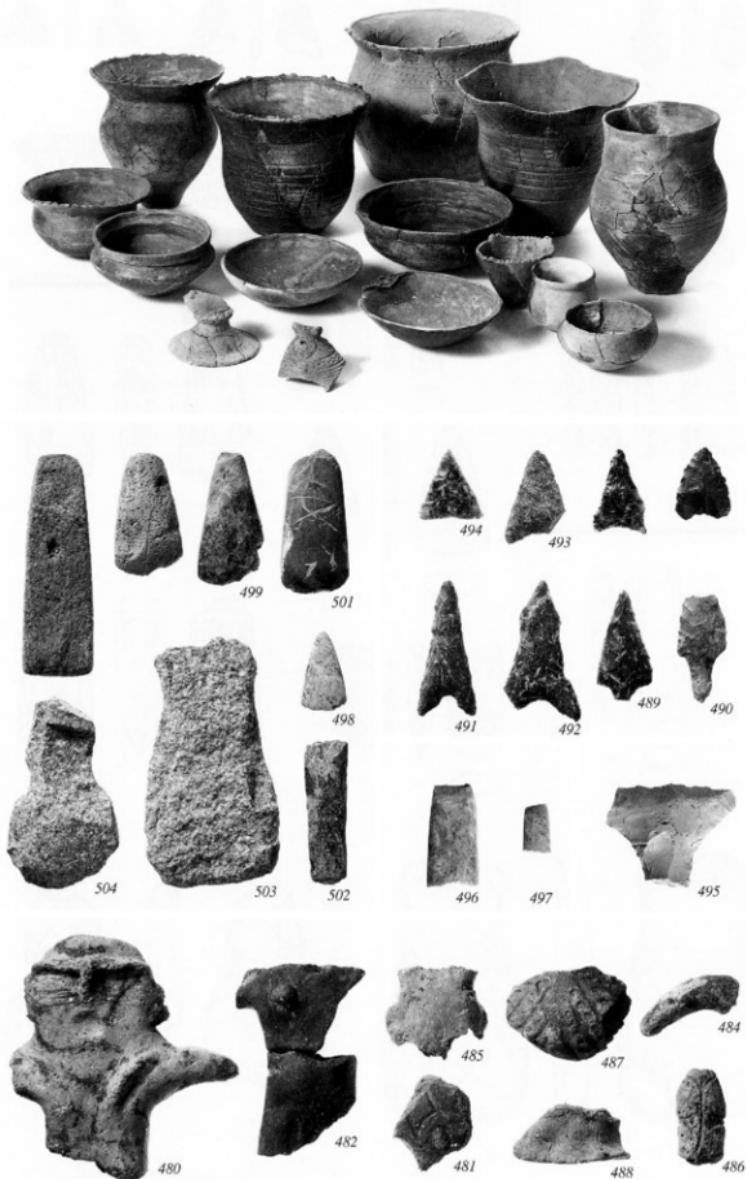
今回の調査では弥生時代末～古墳時代初めの竪穴住居、古墳時代後期の古墳の周溝などを調査した。昭和56年、平成元年・2年の小杉町教育委員会による発掘調査でも同時期の竪穴住居と古墳が検出されており、弥生時代末～古墳時代初めには集落が、古墳時代後期には墓が、そして奈良時代にはまた集落として利用されるという一つの遺跡の性格がより明らかになったと言えよう。谷一つ隔てた南の丘陵上に立地する中山南遺跡でも弥生時代末～古墳時代初めの竪穴住居、古墳の周溝と推定される溝が検出されており、丘陵を単位とする二つの遺跡の関係も興味深い。また、縄文前期～晩期にかけての資料は、昭和20年代に発掘調査を行った小杉高校の調査成果を裏付けることになった。この後期・晩期の土器は県内の様相を知るための比較材料として貴重な資料である。 (酒井重洋・青山裕子)

## 引用・参考文献

- 石川県立埋蔵文化財センター 1986 「漆町遺跡I」
- 金沢市教育委員会 1996 「西念・南新保遺跡IV」
- 小島俊彰・西野秀和・酒井重洋 1994 「北陸の土器編年」「縄文晚期前葉の広域編年」
- 小杉高等学校地歴班 1951 「地歴年報」創刊号
- 小杉町教育委員会 1971 「中山南遺跡調査報告書」
- 1991 「中山中遺跡発掘調査概要」
- 小杉町役場 1997 「小杉町史－通史編－」
- 能都郡教育委員会・真駒遺跡発掘調査団 1986 「真駒遺跡」
- 野々市町教育委員会 1983 「野々市町御経塚遺跡」



第63図 遺物実測図 (496・497 1/1, 489~495・498 2/3, 499~504 1/3)  
SI102 (490・494) その他包含層



図版14 出土遺物  
SI102 (490・494) その他包含層

# 第Ⅲ章 ボランティア発掘体験講座参加記録

## 1 平成10年度

### A 発掘調査を体験した印象

現職時代から埋文調査に関心をもっていましたので、この発掘講座に参加出来て、本当にうれしく思いました。そして「こて」を手にして、一掘一掘、掘り進んでゆく課程で、何が出土するのかの期待感と興味、関心をもって作業を進められたこと、そして瞬間に出土したときの感動は、特に印象的である。また古墳の大きさ、形態等が確認されたことを知り、参加への意欲と歓喜を味わうことが出来た。

ビタリ機じゃないが、読み取られた地層から、その時代の遺物がたがわざ出土する点。作業にかかる前に、なぜこの地点を発掘するのか、古墳ではどんな位置なのか、きちんと説明された後に作業にかかる点。

遺跡・遺構、特に今回のような古墳は、長い間の天変地異により地質が変化している。発掘調査では、このわざかな土地の色の変化で遺跡の構造を判断していくことが印象に残った。自分自身で発掘し、多くの経験を積み重ねての知識で、紙上では学べないことであることを認識しました。遺物整理には参加できなかったので、印象がわからないが、いろんな土器の破片を合わせていく作業は大変に難しいが、うまく結合した時は感激すると思われる。

第7トレントで紅色にかがやく壺が出てきたとき、本当に驚きました。破片ではなくまとまった形だったのでとても感動しました。いくつかのトレントをまわって発掘させてもらいました。少しでも手をかけたトレントには愛着があります。第1トレントでは小さな高杯の一部を発掘する体験ができました。地層・土の色を手がかりに掘っていくということを知りました。

発掘調査に携わったのは今回が初めてであった。前方後方墳の外観やトレントの設定・試掘などにより、そこから上器が出現した時など、喜びは一入であった。遺物整理にも携わったが、水洗いや復元などの手法を知り、参考になった。また、なかなか遺物の復元ができない、大変な作業だと思った。

地域的事情、遺産等を子、孫に、その真実を伝えたいとボランティアに参加した一人ですので、長雨や蚊に攻められただけ、楽しく過ぎました。そして、勅使塚は勅使でなく、豪族の二人？であり、実測は元より数m小型であったと新しく認識しました。他の皆さんも同様かと思いますが、私はねじり鎌で何があるか、何が出て来るかと土を掘る楽しみは初体験でしたので、種蔵人骨？副葬品？の掘り下げなく埋め戻されたことが心残ります。終了して思ったのは、発掘講座だから掘るのが目的だったのかとは思いますが、三世紀頃の歴史背景、又、他県の発掘や遺物等の講義、又ビデオ講座等が期間中にあったら、もっと興味深く発掘参加になったと思います。

一度は遺跡の発掘に参加したいものと思っていたので、たいへん良かった。土削り鎌で少しづつ土を削りながら遺物を見つけると、なにか貴重な宝物でも発見したような気がして、附近の発掘は「また何か出るのでないか」と精が出る。

勅使塚古墳の名称の由来に関わる遺構が、発見されるのではないかと期待した。残念ながら具体的なものがなくがっかりした。名称の根拠は何だろうかと考えてしまった。そして歴史的事実解明の難解性をあらためて知った。

発掘調査は、結構しんどい作業であることがよくわかりました。仕事の都合で現地説明会や研修講義に参加できなくて残念でした。



## B 埋文ボランティア発掘体験講座に参加した感想

県内で大きい古墳といわれる姫中町の勅使塚古墳について埴丘の規模、形状、時期、埋蔵施設の有無等について確定するため、埋蔵文化財ボランティア遺跡発掘調査事業に参加する機会を得たことを本当にうれしく思います。しかし、夏の暑い時期で、木陰であったが、やはり夏は暑い。そして藪蚊の乱舞する中で汗を流しての作業は大変なものであった。

この勅使塚は古墳時代初期で相当高貴な豪族の方が埋蔵されると知り、その実態を知るための本調査まで実施し、埋蔵物を発掘することが出来なかったことが心残りである。しかし、古墳周辺には数は少ないものの、縄文土器、土師器、須恵器等の相当古い遺物が出土したことにより、勅使塚の時代的古さを知ることが出来たことや、前方後方墳での大きさを確認出来たことは、今後の資料となると思い重要な発掘事業であったと思う。

また、古墳を11トレンチ別にして、わずかの部分であったが、コテ、ジョレン、ミ、スコップ等を利用して慎重に掘り進め、出土する遺物に期待をし、流れる汗を忘れての作業から、小さな遺物らしきものを発見した時、グループで見せ合い、推論をしたりし、主事さんの指導を受け、土器であると聞いての感動は、それを体験した者にしか味わうことの出来ない思い出であった。

一方、古墳の境界線、溝等の見分け方も、最初は指示された所を掘り進んでいたが、日の経過とともに新旧の関係を決める土層の色によって掘り進んでいることがわかり、自分で判断できるようになった所もあった。しかし、10日間位での体験では・・・「継続は力なり」の諺の如く、出来るだけ早くの再度体験がなければ忘れるであろうし、土質、形態等によっても異なり、やはり体験が重要であると痛感した。

雨天の日には出土した土器が多く事務所内にあり、その整理をしたが、何一つ組合せをすることが出来ず、残念ながら土器そのものについての勉強が必要であると思った。

私は1日半しか参加出来なかったのですが、その前日に出土した赤い焼物の遺物が速その翌日にカラーコピーでボランティアの方々に渡され、私もいただきました。このようにしていただきと参加者はもちろんはげみが出来ます。ひとけずり毎に胸をはずませて掘ります。そして家族にもその喜びを伝えることが出来ますのでとてもよく、土との対話が楽しめた時間でした。また次期の発掘が待たれます。

最近の考古学のブームに魅せられて定年退職後の趣味として飛鳥・奈良時代以前の歴史を研究したいと思っています。この時代はロマンがあり、新しい発見があり、日本の歴史像も随分豊かになってきています。ひとつの発掘は古代の歴史を塗り替えるかもしれません。全国的にも奈良県の黒塙古墳で出土した三角縁神獣鏡の多数の発掘等もあり、新聞には毎日この種の記事が書かれています。当県にも桜町遺跡の各種建築部材遺物の出土や水見の柳田布尾山古墳の発見と話題にことかかないところです。

今回の講座に参加して、10日間久しぶりに身体を動かし汗をかきました。発掘講座に参加し経験と健闘をえて頂きました。また、発掘には多くの労力と予算がかかることが理解されました。遺跡の調査費用は土地の利用者負担が原則とのこと、そのため遺構の発見は偶然の場合が多いと思われます。例えば勅使塚・王塚と鏡坂・蓮花寺地区の関係づけを調査したいとしても、道路や大規模開発がなければ予算が無くて出来ません。国や県の予算を確保する為には国民のコンセンサスを得なければなりません。そのためにはPRが必要です。桜町遺跡や水見の柳田布尾山古墳について盛んにインターネットを使ってPR活動しています。県民の理解を得るために埋文ボランティア体験発掘講座をPRして、労力と予算を確保してこの地区を調査すべきです。もっとPRすれば、考古学に魅せられ発掘調査・遺物整理等に興味を持つ人がボランティアの参加者として集まるでしょう。

以前より遺跡に興味がありましたかが、何の知識もなく迷惑ばかりおかけすることと気後れしていました。今回は、ほんの一部の作業に参加しただけで、事前の調査、研究、準備など、すっかりお膳立てされた上での作業でした。たった10日間の一一番楽しい部分の作業だけさせていただいたことがあります。きっと長い時間をかけ、いろいろの手がかりから遺跡を探し、調査を重ねて発見していかれるのだと思います。遺跡があるかどうかわからない山歩きや、レーダーなどによる調査の段階からも見学できるとうれしいです。

雨の日の事務所での作業――発掘してきた土器のかけらを接ぎ合わせる作業や、一見ごみのように見えるものを丹念に調べ、中から遺物を探す作業――も楽しくできました。何も結果は出せませんでしたが、長い年月、地中に埋もれていたものに触れ、たくさんの土器のかけらからいくつかのつながりで形ができるいく作業を見て、ご苦労を思いました。石器時代であれ、縄文時代であれ、また古墳時代であれ、どんな思いでどんな生活がくり

ひろげられたのか、興味尽きないものがあります。文字や映像で記録されない時代のことを、どんな手がかりから想像していくのかわくわくする思いです。

実際の発掘では、いくつものトレーナーを掘り、それぞれのトレーナーは何を調べるために掘ったのか、説明していただきました。事前の調査・研究があって、確認していくためだということを知りました。

本年の夏（平成10年8月）に勅使塚古墳の試掘調査に参加することができ、多くのことを学ばせていただきました。古墳の発掘調査をするのは、私には今がはじめてであるが、青森県の三内丸山遺跡や小矢部市の桜町遺跡などの発掘の状況がマスメディア（mass media）を通じて知るにつけ、以前から興味をもっていた。

ところで、今回ははじめに勅使塚古墳の概要や調査方法の説明があり、作業に取りかかった。古墳の周りに11カ所のトレーナーを設定し、発掘し古墳の全体像をつかむ作業であった。じょれんで土をけずり、トレーナーを掘り進んでいくうちに、地層の変化があり、土盛りしたところなどがわかった。また、出土品から年代を知ることができることなども、作業を通して知り、多くのことを教えていただいた。

遺物の整理作業においても、細心の注意で作業を進めなければならぬことなど、整理方法を学んだ。この体験により学んだことを、今後、役立てる機会があれば良いと思っています。

今度の発掘で塚頂上部の発掘は棺のある所まで発掘してほしかった。又、土器破片の発掘された附近はもっと周囲を広く発掘してみたかった。解説では、塚の造成期は4世紀とのこと、医薬大付近に四隅突出型墳丘墓があることでもあり、現代人にロマンを抱かせるような、射水臣か婦負臣の墳墓につながるような仮説を立て、地域住民や関心のある人達への説明を。それには、より一層の発掘調査や各地で発見されている木簡等の研究で越国姫貞女（詳）の発見をお願いしたい。

発掘体験の期間については短く感じた。せめて現地説明会の直前までやりたかった。発掘調査全体における貴重な実感が湧かず、不完全燃焼の思いだった。

遺物整理作業については、緻密な根気のいる作業という印象を持った。あまり役に立たなかつたが、もう少しやってみたかった。また、発掘と直接的に関わる遺物洗浄の作業も経験したかった。

また、発掘中の現場見学を実施してほしかった。見学により作業実態の理解が深まり、それが作業効率や遺跡理解につながると思った。

遺跡の発掘は以前からやってみたかったので、とても楽しみにしていました。しかし、初めてのことでのうまく要領がつかめず、例えば、土の色が変わるもの掘るべきところを、その境目が分からず、自信を持って掘ることができませんでした。また、別の日、狭いトレーナーで3人で掘っていましたが、ちょっと窮屈で、作業がやりにくかったです。他の2人に迷惑をかけていたみたいでした。

しかし、土器片を1つだけですが、見つけることができて、うれしく思いました。参加した甲斐がありました。記念に持って帰りたい程でした。

今回は仕事や私用のため、実際に参加できたのはたった2日間だけで、発掘作業のノウハウを十分つかめないまま終わってしまったのはとても残念でした。次回には、できるだけ時間を見つけて参加したいと思っています。



## 2 平成11年度

### A 発掘調査を体験した印象

土を掘っていてカチッと何かに当たった時、ドキッ、ワクワクの気持ちです。丁寧に掘っていくうちに赤茶けた紋様のある土器が姿をあらわした時の本当に嬉しかった。とっても感動しました。あの感動は一生忘れません。

人が暮らしていた生活の様子が分かり現代の生活流の進歩のあとが印象として残った。

私は今年度は勤務の都合で、縄文ボランティア体験発掘調査の最初と最後の日しか参加できませんでした。しかし、説明会の話いや頂いた資料を読み、大変よい勉強になったと感謝しております。だが、本当に身につく学習は、昨年経験したように、体をかけて発掘してみることが必要だと強く感じました。

私達ボランティアによって発掘した土器等の遺物や地中の土色、硬さ等によって時代（縄文、石器）等がわかる事におどろきと感動が残りました。

好きでなければ出来ない体験だとは思いますが、人生も引退しかけたこの時にほんとうにいい体験をさせていただいたことに感謝しております。自分もさることながら、もっともっと子供達に生きた現場学習として、文化を振りおこす発掘体験をさせてやりたいものとつくづく思いました。

旧石器時代のナイフ形石器をはじめ、発掘した時はただの石ころと思っていた物が、すり石や凹み石と聞き、こんな所に1万5000年も前から我々の祖先が生活していたと思うと考え無量です。また、貯蔵穴などいろいろな遺構、遺物をみてその時代時代で、人間の考える《発明》力の偉大さを認識させられました。

初めての体験だったので、スコップの持ち方にもコツがあるとか、がむしゃらに遺物が出るまで一ヵ所を掘っていくのだと思っていたら全体を平らに掘り進めていくとか、毎日の作業の一つ一つが印象に残りました。

縄文土器に触れた時の感動は大きかった。そして破片がどこの部分なのか、全体の形はどうのようなものかなど思いめぐらした。しかし私の貧困な知識では到底及ぶ物ではなかった。残念だった。

住居跡の柱穴の深さに驚いた。確りした住居だったのだろうと思った。また当時の降雪の状況はわからないが、雪の重みで柱が沈下したのだろうかとも勝手な思いをしてみた。

昨年度の勤使塚の発掘と異なり、本年の永代遺跡は、土器・石器等が多く出土し、自然に手の動きが速くなり暑さを忘れての作業に熱中出来た。やはり発掘体験であるから、出土数の多いことを願い、1個でも多くの土器を掘り出したいと言う願いをもって作業を進めることができた。その経験は印象的であった。

昨年度勤使塚古墳発掘の折りは、大きい赤い土器が見つかりびっくりしました。今年度永代遺跡では、初日から次々と土器が出て感動しました。色は勤使塚のように鮮やかではありませんが、美しい模様が見られました。その鮮明な模様の美しさと、土器の量の多さに圧倒されました。事前に「たくさん出ますよ」と聞いていましたが、これほどとは思いませんでした。竹串や竹べらで丁寧に掘り進める楽しさを十分味わいました。また、貯蔵穴や柱の穴も掘らせてもらいました。柱の穴が深いのに驚きました。

4日間の参加でしたが、住居跡も発掘され、出土品も多く縄文土器、石器、土偶などから人の暮らしぶりに思いをはせ感動の連続でした。又かもしかの出現に驚き大声をあげたこと、大自然の中でボランティアの方達との交流も深まり、とっても有意義な日々でした。

上市の永代遺跡では黒ゴコ土の地層から縄文土器が集中して出土していた地点は印象的でした。



永代遺跡の発掘に初めて参加しました。そこは畑土のやわらかな掘りやすい所だったので、埋蔵物と土とがきっちりと分かれていて、いま迄考えていた以上に掘り易いと思いました。又、掘り始めて適当な時に遺物が出て、発掘しているんだという実感があった。何も出ない所は少しがっかりしました。

発掘によって、出現した地表面が5千年前も昔、人が生活していた場所だというはすごく不思議な気持ちがしました。

出土物が多かったので掘っていて楽しかったです。いろんな文様や、形をよく残した土器が出てきたときは感激でした。また土器や住居跡等から、人々の生活を垣間見ることができ、縄文時代が身近に感じられました。土壤は柔らかく掘るのは比較的楽でしたが、しゃがんでの作業なので、ちょっとしんどかったです。

## B 埋文ボランティア発掘体験講座に参加した感想

大きさに言うと一生のうち一度は発掘するものをしてみたいとかねがね思っていました。若いときは勤め、家事・子育てと忙しくとてもできません。退職してからは、桜町などの発掘を横目で見ながら、キツイ仕事は今度は体力が続かないし、等々思っていたところこの発掘体験講座を紹介してもらい参加させていただくことになりました。なまっていた体もふるい起こし適当な疲れを感じましたが、何よりも何かが出土する喜びとボランティア仲間との談笑。時々聞く専門家のお話等、楽しい楽しい10日間でした。

柱の穴を掘っている時など、土の色が変わるものだと掘ると土の色が変わらずほんとうにそんな変化までてくるのだろうかと半信半疑で、体を逆さにして掘っていくうちに薄茶色の土を見た時、あーこんなに深く支柱をうめていたのだなと感動したり、又上の色が変わった床が出るとこの床の上でどんな生活をしていたのかなと思います。

発掘体験は自分の為めにもなるし、又個人では発掘出来ないものを発掘作業をさせて戴き感謝しております。

今年度は勤務の都合でどうしてもボランティア期間中に時間が取れず、発掘調査体験には参加できませんでした。しかし、私個人としては、調査実施の数日前や途中で、上市川の河岸段丘の状況、永代遺跡の現状、発掘の状況や事後の状況を観察におとずれ、よい学習をさせて頂きました。以前に永代遺跡横を流れる農業用灌漑用水路を掘った時にも住居跡や遺物が出土したことですが、この永代遺跡の位置は地形からみて上市川より相当高い所の山間地にあり、こんな所にも古代人が住んでいたのかと、新たなことを学びました。

ほんとうに貴重な体験をさせていただいたと思っています。先日も大林宣彦氏の講演をお聞きした時に、20世紀は文明・科学の進歩は著しいが、反面、文化特に心の豊かさ、情感、人間性、人間味とでもいいますか、そんな物が失われていって非常にアンバランスな世の中になっていて淋しいとおっしゃいました。今後は文化的掘り起こし、発掘をしてあらゆる面でもう一度豊かな21世紀を迎えるものだと結論づけられました。

2年間にわたり参加しましたが、非常に素晴らしい体験をさせて頂きまして有難うございます。体験場所等の選定や段取りご苦労されていると思いますが、われわれ素人に発掘させて大切な遺物が破損しないかと横で指導されながらはらはらされてきたことを思います。

お陰様で、最近日本海側最大の前方後方墳として「柳田布尾山古墳」が脚光を浴び見学会等にも参加致しましたが、昨年の勅使塚古墳の発掘を体験していたので、その古墳の偉大さや意義が良く理解されました。

また、今年度の永代遺跡発掘体験講座も自分の手で掘り当てた遺物はわが子のように可愛いものです。そのた



め自分で発掘した土器の破片がありますが、今年の年賀状にその写真を載せました。

とにかく初めてのことでしたので、毎日の作業で現場が変わっていく様子が珍しくもあり、感動することもあり、とても楽しかったです。去年参加した人から掘っても掘っても出てこなかつたという話を聞きましたが、初日から土器の破片がたくさん出てきて‘これぞ発掘’という感じがしてうれしかったです。

9月とはいえ、炎天下での作業にバテるのではないかと心配しましたが、午前、午後2時間ずつの作業は無理なくこなすことができ、少し体力に自信をもちました。

発掘終了後、ボランティアを含めて遺構、遺物等について自由に推論を出し合う機会があつてもよいのではと思った。また、ボランティア活動について、企画展などの準備作業に手伝いの要請をされてもよいのではと思う。

宮山県における遺跡の整備（公園化など）が、他県に比べ劣っているような印象が強い。子どもたちが遊べる環境のなかから遺跡への関心が高まり、情操教育にも役立つものと思う。また、県内の遺跡を尋ねるなかで、埋め戻された遺跡の場所がよくわからないことが多い（案内板がなくなっていることなど）。残念に思う。

塙文ボランティア発掘体験講座2年目はいつ頃、どこで実施されるのだろうかと思っていた時、ご案内いただき上市町の永代遺跡と聞き、「遠いなあ」と思案した。しかし、同上と話し合い出席することにし、自家用車で40分程度走った所に眼目山の標識があった所から右折し、民家の畠地の上市川河岸段丘にテントを発見し、すでに堅穴住居があり、その周辺の発掘計画であると感じられた。

ここは、塙と異なり永代遺跡は縄文時代の集落跡であり、堅穴住居跡の南側の発掘を始めた。発掘ではいつも宝物のような高貴な出土品を掘り出す夢を持って望むものである。今回私達は大きな土器は発見出来ず、小さいもの（2cm～5cm）が数多く発見され、その1つ1つには、はっきりと縄文の跡があり、縄文文化の生活の姿が偲ばれた。また、石器らしきものを発見すると、石斧等ではと喜びが湧いて来たが、主事さんに聞くと普通の石と判定され、「がっかり」。このような試行錯誤をすることにより、体験学習に磨きが加わるものだと感じられ、今回は質より量の発掘に全力を傾けた体験だった。また、土壤の色の変化による発掘の程度についても、少しづつ理解できたようで、私自身の勉強になったと感じ成果を挙げられたと自負しているのである。

あちこちの発掘によって‘今までの古代史がぬりかえられる’という言葉を聞きます。今までの古代史の理解もない者にとって、どんなに価値のある発掘なのかわからないことにもどかしさがあります。しかし、ただわけもなくワクワクして発掘体験講座に参加させてもらっています。

大きな道路が整備され、大きな建物工事があるたびに遺跡の発掘や保存のかかわりはむずかしいものがあると思います。しかし、ながい眠りからさめたような遺跡は何百年何千年の時間を経て現代に語りかけているものであるわけで大切にしていかねばならないと思います。

発掘体験させていただいたお陰で、展示品を見る楽しさも違ってきました。今回いただいた考古学年表で永代遺跡や駒使塚古墳に印をつけ、今まで見学した所や展示されたものを見たところはどの時代に位置するかわかり、しばらく楽しみました。

考古学は苦手で、各地での遺跡発掘調査の報道がされてもまったく無関心だった私に、永代遺跡発掘調査は二回目の受講となりました。土層除去後の土器にふれた瞬間の喜び感動、いまだに忘れられません。発掘調査に携わっている人達の気持ちが少し解った様な気がしました。出土品を再現するまでのどの作業も気長に、根気よく、そして慎重にやることの大切さも解りました。学校の教科書では学べない体験学習が出来、ボランティアの



人達との交流も深まり、大変よかったです。又機会があれば古代ロマンを求めて参加したいと思っています。  
最近は観光がてら行った先の博物館や資料館へ寄ることもあるが、たいていはその歴史を語るのに出土品が展示されている。それによってその土地での人々の暮らし始めがわかるから、かなり以前から人が住んでいたんだとか、わり合新しい歴史の所だとか、単純に通り一遍の見かたをしてきました。体験講座に参加させていただけてからは、地層を描いたり環境を創造したり、器の厚さや線等にも少しばかりですが目をむけてみるようになりました。永代遺跡の黒ボコ土はとても手ざわりがよく美しく感じました。

近年、三内丸山遺跡や吉野ヶ里遺跡等、全国各地で大変重要な遺跡の発掘が行われています。それに依って古代史ブームが起っています。昨年から今年にかけて、我が国で最も古いと考えられる遺跡から石器が発掘され、学会の歴史が書き替えられる位の重要な事が起こっています。奈良県飛鳥村では亀石と云われる精巧な彫刻が出土し全国民の耳目を集めました。宮山県に於いても、これ迄考えられなかった様な物が出るかも知れません。古い「言伝」等は軽く見る事は出来ないと思います。それらは、やはり何かあった事を伝えているかも知れません。

以前から発掘というものを体験してみたいと思っていましたので、この講座はとても楽しかったです。特に織文土器は形も模様も力強くて「いいなあ」と思っていましたので、自分が掘っている土の中から、土器が出てきたのは大変感動しました。私たちはほんの上部だけの、楽な所だけやらせていただいたのだと思いますが、すごく楽しかったです。休憩している時、冷たいお茶もおいしかったし、吹きぬける風の気持ちよかったです。

1年ぶりの発掘体験は、楽しいものでした。縄文時代には興味があったので、楽しみにしていました。今回は出土物も多くてやり甲斐があり、宝探しの感覚で掘らせていただきました。体験中は土器や石器が手に当たる度に、「出たー」と感動しながら掘っていました。しかし、シャベルなどでうっかり土器を傷つけたことも何度かあり、反省しています。前年度は2日しか参加できず、物足りなく思っていたので、今回は少しでも多く出られるよう、職場にお願いして公休や代休をうまく入れてもらい、参加することができました。

また機会があれば参加したい。経験を多く積むことによって新しい興味が又出てくる様に思います。



### 3 平成12年度

#### A 発掘調査を体験した印象

七世紀頃の人間の仕事場（安居窯）の発掘体験に参加し思い出の増えた事に感謝しますが、発掘現場が斜面だったのでなれるまで足が大変つかれました。

登り窯（地上式…信楽焼の窯元）を見学した事もありますが、今回半地下式だった事と水はけが悪くなると次々に移動した事。高い温度で土が焼けると美しい青色で残っていた事や、多数の炭が地中にあってもくさっていなかった。

多くの須恵器の中に初めて見る土馬という生焼の遺物に感動しました。現代は占いは遊び感覚ですが、何時の世も人間は強いようで弱いんだという事を土馬（まじない用、祭り用）で知りました。

今度の窯跡調査は急斜面を利用した、当時の住民の生活の知恵を生かした作業跡の発掘であった。これを発掘するために、体の安定性の維持と地層の変わりぐあいを考えねばならず困難な作業であった。しかし、窯跡であることから多くの出土品があり、作品のすばらしい模様について大きければ大きいほど、美しさが痛感される作品で、期待を常に保持した体験で、出土品も量的にも質的にも良い作品があり、心に残る機会であった。

斜面を利用した所に共益な物がある物だと思われました。

次々に出てくる須恵器、大きくかたまたった破片の数々、高杯の一部とわかるもの、壺と思われるもの、すぐにもつなぎ合わせて見たいと思いました。

いったん出てこなくなってしまって、更に掘り進めると、又たくさん出て来て、層になっていることがよくわかりました。これは灰原といつて、失敗作などを捨てたところだということですが、ごみ捨て場がとても楽しいところとわかりました。

須恵器の目こまかい表面「たたき」による同心円模様の裏面とても美しいものでした。

登り窯の焚き口さがしで、どんどん掘り下げ、予想通り焚き口がみつかりました。よくこんなことが予想でわかれり、実際それが確認できるということに感心してしまいます。

古代のどんな人がこの須恵器を使用したのだろうかということを思いながら掘っていました。

美しい青海波の模様に当時の制作者の技術のすばらしさに感嘆したり、今日の陶器と比較もできました。

雨の日に拓本の仕方を教えていただきて大変興味を持ちました。

今年度は窯跡の発掘ということで、はじめから楽しみにしていた。丘陵地の斜面を利用しての登り窯を実際に見て、現在の陶芸作家が作っている登り窯と余り変わらぬことを知りおどろいた。又、土器の模様が表・裏にある事、これも製作手法の結果だという事も学んだ。道具を使用してあの美しい紋様ができる事、特に内側の青海波を組み合わせたモダンな感じが大変すばらしいと思った。落ちていた青灰色の色も好きだ。(現在の唐津の“たたき唐津”の手法、古代からの伝承と知り驚く思った)とにかく今年度は多く出席できなかったが、たくさんの事を学び、感動の大きい発掘でした。

この場所は現在の富山県では辺鄙な所でも古代では最も先進した地域であったこと。

7世紀から8世紀頃に須恵器の窯業生産をとおして古代律令国家が完成したこと。

灰原のため、破損した須恵器のくずばかりで残念でありました。



杯や高杯等のかけらが多数ありましたが、陶器や瓦がなかったように思います。

ただ土馬の一部が発掘されたことに喜ばしいことです。

窯跡の一部分のみの発掘で、初心者には窯全体の理解が出来なかった。

例年より国体の関係で発掘作業が早く始まり、自分の出席が少なかったこと。

今回は須恵器を焼いた窯跡で、構造などよく分からぬ部分もありましたが、7世紀、この地域に住んでいた人々の生活に、少しばかり触れた気がしました。

飛鳥時代は、奈良など歴史の中心になっていた地域の文化、歴史はよく知られていますが、地方の歴史はその陰に隠れていて誰の部分が多いので、どのような生活をしていたのかイメージがあまり湧きません。しかし、今回の発掘によって少しは分かったような気がします。

暑い時期で、山の斜面での作業はちょっときつい感じでしたが、須恵器も沢山出てきてやりがいがありました。

住居跡とか古墳というのはあちこちで掘られ、新聞などにもよくのっているが、窯跡というのは私の意識のうちになかったことで、掘る前から楽しみにしていました。山の斜面を利用した登り窯と高温で焼かれた青い須恵器の感触が忘れられません。本当に珍しい発掘を体験させてもらい感謝しています。

自然の地形をうまく利用して窯を築いてあるのはいつの時代から始まったのだろうと思います。最も早い時代の事等が分かったらと思います。かけらがもっと多く出るかと思っておりましたのに、少しがっかりしました。

土馬など変わった物がもっと多ければ良かったと思います。

毎日暑い日が続いた事、汗が目に入つて痛かったけれど、黒い土の中から色の違う土器が次々と出てきた時は嬉しかったです。これが土器と須恵器だったんですね。

平地で掘ればすぐ土器の破片が出てくると思っていたので、とても大変だった。広い敷地の中での確に遺物が出てきたので、事前調査の御苦労を感じた。

発掘調査自体が初体験だったので、すべてが印象に残っています。その中でも特に残っていることは、土器のかけらが幾重にも重なって掘り起こされたことです。博物館やテレビでは、発掘されたものが整理されて、ほぼ完全な形に修復された状態は見ることはあっても、それ以前の状態はなかなか見ることがなかったからです。また、発掘調査というのは、単純に掘るだけでなく測量や試掘やら様々な手順があるということがわかつたことも勉強になりました。今年度は窯跡のため、たくさんの土器のかけらが毎日見つけることができたことも楽しかったです。

地元福野町に住んでいるので、現地で数片の須恵器を表探したことはあります。この度、発掘によってあれ程の量を焼いた窯跡と知ることができ、びっくりしました。また、単に器ばかりでなく、祭祀に使われた土馬も生産していたことが分かり、大変有意義でした。

## B 埋文ボランティア発掘体験講座に参加した感想

多くの遺跡の発掘調査が行われている多忙の中で、本講座が時間ロスを招いているのではないかと心配しております。また作業実績も充分でなく足手まといになっているのではと懼縮しながら作業していました。

しかし一方では、最初と最後の仕事に携われることからか、何か不完全燃焼の気持ちを感じているのも事実です。見学などで臨場感が体験出来る機会を作っても良いのではと思う。また発掘技術の向上のために詳細なこと

